



林野庁
rinya.maff.go.jp

平成27年度
新たな木材需要創出
総合プロジェクト事業

平成27年度

木育・森育 楽会誌

～集いと学びの記録～



第1回 木育・森育楽会 開催報告



Mokuiku Moriiku Gakkai



平成27年度

木育・森育 楽会誌

みんなつながっている

全国木育・森育活動事例報告

研究者の立場から

木育・森育論文集

木育の今、そしてこれから

座談会



Mokuiku Moriiku Gakkai

第1回 木育・森育楽会 開催報告

ごあいさつ

木育・森育楽会誌発刊に当たって 1

基調講演

「子どもの“からだと心”の現実と木育への期待」 6

リレーディスカッション

「木育・森育の歴史～もっと木育・森育を！」 12

モーニングセッション

「北海道の木育と木育マイスター」～木育の10年は、これからの10年へ～ 20

「森遊びで大切なこと。〈意図する教育的要素〉」 24

ランチセッションレポート

「森の中で、木楽なトークを…“ロボ木”と“光合成”で!!!」
～理科で学ばない、森の樹木で光合成と炭素固定～ 28

分科会レポート

1. アート 日本人は何を学ぶのか？ その美意識を探ります。 29

2. 子育て 今、ママたちの考える木育への意識は？ ～ママのチカラで日本の森を元気に～ 30

3. 遊びと健康 「あそび空間」や「おもちゃ」や「森林活動」に何が加わると「木育」になるのか？ 31

4. 空間・環境 環境って何だろう？ ～森に学ぶ暮らしのあり方～ 32

5. ひとつづくり 楽しみながら木育の輪が広がるポイントは？ 33

6. まちづくり まちを元気にする、デザイン、つながり、そして変人 34

ワークショップ

1. リュールシロフォン作り 35

2. ファーストスプーン作り 35

3. ペーパーナイフ作り 35

学びの広場

1. 今さら聞けない森の話 ～日本と世界の森のしくみ～ 36

2. 木材の基礎講座 ～木材を使って今よりちょっと豊かな生活～ 36

3. 森林基礎知識 ～森林の役割って？～ 36

ナイトセッション／木育・森育コンサート+α 37

ポスターセッション 38

第1回 木育・森育楽会九州大会 講演要旨集 39

楽会を終えて 52

活動事例 53

目次

《右開き・縦書き》

全国木育・森育活動事例報告

1	木育ファミリィ	5
2	北海道むかわ町	6
3	NPO法人生態教育センター	7
4	森のようちえんピッコロ	8
5	株式会社ON-WIPPS	9
6	きまま工房 木楽里	10
7	森と子育て文化をつなぐ研究会 ウレシバモシリ	11
8	東京おもちゃ美術館	12
9	公益財団法人 木材・合板博物館	13
10	おだわら森林・林業・木材産業再生協議会	14
11	岐阜県立森林文化アカデミー	15
12	NPO法人サウンドウッズ	16
13	特定非営利活動法人 森の学校楠学園	17
14	島根大学教育学部附属幼稚園	18

木育・森育論文集

木育普及事業をさらに進化させるための今後の課題 教員養成大学・学部と木材科学研究成果を活かして	山下晃功	19
管理放棄された樹林地の再生と自然とのふれあい 千葉県松戸市における取り組み	柳井重人	21
森林親和運動としての木育	田口浩継	22
大学における身近な自然環境での林業実習の実践	東原貴志・柏倉美沙	23
木育・森育の展望	浅田茂裕	25
座談会 オリジナリティあふれる活動を展開する木育アクターたちに聞く 「木育の今、そしてこれから」		26

「木育・森育の歴史～もっと木育・森育を！」

浅田：平成16年に北海道で生み出された木育という言葉。その後、色々な経緯があって、木育が今日まで進んできました。このリレーディスカッションでは、そういう木育、そして新たに付け加えた森育の歴史を振り返って、皆さんで理解を深めようと思っています。といっても、実は明日の朝、モーニングセッションで北海道庁の熊尾さんにご登壇いただくことになっていますので、林野庁で木育が始まった平成19年あたりから話を進めたいと思います。

まず平成18年の森林林業基本計画に、木育を進めましょと記載されたのが始まりになります。その前の平成16年に木育については北海道から木育に関する報告書が出ています。その3年後から林野庁の木育がスタートしたということです。

さて、最初の方をお呼びしたいと思います。島根大学名誉教授、チャーリーこと、山下晃功先生です。

(会場 笑)

山下：島根から来たチャーリーでございます。よろしくお願ひします。

浅田：それでは山下先生、木育の黎明期について少しお聞かせください。

山下：平成19年、第1次の木育推進体制整備総合委員会という、木育を進めるための委員会が立ち上がりました。その時、座長を仰せつかりました。しかし私も含めて、木育って一体どういうことなんだろうかと。木育の先輩格の育のつく食育がありました。第2弾は木育だと私は直感的に思いました。

浅田：当時の委員会での議論はどんな様子だったんですか。

山下：この新しい木育をどういう風に一般の方に分かりやすくお伝えしたらいいんだろうか。木育ってどういう哲学、どういう考え方、どういう理念があるのか。と同時に、この小難しいことを老若男女に分かりやすく広めるための方法、いわゆる教材、それを伝えていく人材、インストラクターなども養成しなければいけない。

それと全国各地で、この木育がこれから国民運動として動くんですよという機運を高める木育フォーラム、そういうものも実施しなくちゃならない。色々な計画の下に3年間、私ならびに



司会：浅田 茂裕氏

当時は20数名の委員の方と一緒に、いわば全国版木育の基礎固め、基礎作りを私の務めとしてやらせていただきました。

浅田：その前年、平成18年の森林・林業基本計画に「木育」の記述が出るわけですが、これを先生はどのように見ておられましたか。

山下：いよいよ時が来たなと。いよいよ私たちの時代が来たんだと、私は本当にワクワクして受け止めました。



山下 晃功氏

浅田：私も一緒に委員をやらせていただいたんですが、正直なところ、ワクワク・ドキドキとはほど遠い状況だったと記憶しています(笑)。座長として、色々なご苦労があったと思うんですが、当時について少しお話いただけますか。

山下：一言で言えば、第1回の委員会は波瀾万丈でした。ということか。普通、林野庁さんのご支援と指導で行われる委員会ですから、通常は事務局があらかじめ原案をつくって、それを委員の方に承認をしていただく。それが一般的で、効率的なやり方なんです。ゼロからそれぞれの意見を出し合って、それをまとめるなんて、この種の委員会ではとても不可能なんです。



野さん。当時の木材利用課の消費対策班の班長さんです。

河野：皆さん、こんにちは。元林野庁の職員で、元公務員です。今は森林総合研究所というところに出向しています。ご紹介の通り、平成19年に木育の立ち上げの担当課長補佐をやっていました。その縁で、皆さん方とずっとお付き合いさせていただいています。

浅田：今、山下先生からいろいろお話がありました。河野さんからさしさわりのない範囲でお話をさせていただけますか。

浅田：一応は原案は出ましたよね(笑)。

山下：はい。ちゃんと事務局が理路整然と一つの原案をつくって、そして書面にして委員の皆さん方に配布して、さあ、これからこういうスケジュールで、こういう内容でいきますよと出したんです。ところがそれが委員の逆鱗にふれちゃった。

「座長、それはないでしょう」「全国から貴重な時間と貴重なお金を費やしてここに来て、私たちの考えを聞かずに原案が出て、これを承認しろとは何ごとか」と。まさか、こんなオフィシャルな委員会ですら露骨な意見が出るとは思いませんでしたが、出ました(笑)。

浅田：議論百出、侃々諤々、大変でしたよね。

山下：一つ口火が切られると、あっちでもこっちでも、連鎖反応、化学反応。会全体がわやくちゃになってしまって、事務局真っ青。座長である私はもう本当に血の気がずっと引いていきました。仕方なく、じゃあ、皆さん、それぞれ心に思っている木育をどうぞ語ってください、と全員にお話していただきましたよ。

結局、木とか森との関係で、先発隊として出ていったのは森林環境教育でした。森をフィールドとして活動しておられる皆さん方もたくさん委員として出ておられました。そういう方からすると、何、木を伐って木を使うことは、これは森林破壊じゃないかと多分誤解されたのではないのでしょうか。第1回目はそういう意見に直面しました。

でも側にいたんですよ、あの浅田先生が。僕は頼りにするのは浅田さんしかいないから、ちらちらと目線をやるんですが、なかなか私に伝えてくれないんです(笑)。いやあ、本当に孤立無援の大変な初回だったと。取りあえずこの辺でいいでしょうね。この話をし出すと長くなりますので、この辺で(笑)。

浅田：さて、実は今日、そのわやくちな委員会当時の林野庁木育担当の方もここにいらっやっています。現在は森林総合研究所勤務なんですが、登壇されて大丈夫ですか、河

河野：今、山下先生が、口が裂けても言ってはならないことを半分口を裂いてしゃべってしまわれました(笑)。でも、確かに当時はもめました。終わったあとに山下先生と一緒に飲みに行ったんですが、がくっと、骨格全体が崩れ落ちそうな、そのぐらいになっていたという記憶がございます。

浅田：当時林野庁としては、木育に対してどのようにお考えだったんですか。

河野：平成18年に森林林業基本計画に木育という考え方が打ち出されたんですが、それから木育委員会が立ち上がるまでの半年間、必ずしも木育の定義や考え方が十分煮詰まっていなかった。その段階で木育委員会を立ち上げてしまって、かなり混乱してしまったのかなと、そういう反省はございます。

浅田：僕らはよく振り返って話をするとき、「あの頃はなんも分かつたらなかったな」っていいます。当時の担当官としては、目指すべき方向とかあったんですか。

河野：当時、木育の検討会第1回目っていうのは、本当に多様な人がいらっやいました。川上側の人も川下側の人も。大工の棟梁さん、森林環境教育のNPOの方も。そういう人たちが木育というのを何とか立ち上げようという熱い思いの中で、それぞれ自分の思いをしゃべられるわけです。例えば、ある方は木育を通じて優しさと思いやりのある人をつくるんだと。それが木育なんですと。私どもが非常に悩んだのが、そういうものをいかに最大公約数を取って木育の概念をつくっていくかということでした。

浅田：非常にたくさん、多様な意見がありましたね。優しさのようには抽象的なものから木工のように技術的、具体的なものまで。

河野：優しさとか思いやりを含めて、少しずつ木育の定義が

つくられていくわけですが、私どもが注意したのは2点ありました。要は、多様な客体がいるので、あまり木育の定義みたいなものをぎちぎちやっても仕方がないんじゃないかなと。木とか木材を通じて人を育む。そして最終的には環境とか森林とか、そういうものを想起させる活動なのではなからうかと。

それからもうひとつ注意したのが木育と森林環境教育のデマケーション(区分、境界)です。森林環境教育が先に出ていましたから。行政の立場、または学術的にどういうデマケーション、あるいは役割分担をするか。はっきりどこかで線を引ければいいのですが、なかなかそれができない。例えば、小枝を使ったクラフトとか作業、そういうものはたして木育なんだろう。森林環境教育なんだろう。フィールドに出て行って小刀を使って何かをつくっていく。それで木材の香りを楽しむ。それって森林環境教育なの？木育なの？と。最終的に木育と森林環境教育というのは、相互乗り入れをするような、そういうじわっとしたところがあるんじゃないかなというふうに結論づけました。結果的にそれが今日の木育の広まり、取り組みやすさ、さらにこの場につながっていったんじゃないかと思っております。

浅田:木育の定義はものすごく難しかった。ただ、当時は木材教育というか、既存の木材加工教育みたいなものを中心として考えようという雰囲気がありました。それは歴史的な意味もあって。そもそも木材の教育というのは、日本でもかなり古い教育の一つなんです。山下先生、ちょっと解説いただけますか。

山下:日本の学校教育の中で木を扱った学習内容がいつ頃から取り入れられてきたか調べてみたことがあります。義務教育で言いますと、実は、日本に学制、学校制度が敷かれたその時から、木でもものをつくる、工作的なものが必須教科の中にあっただけです。数えてみれば、もうゆうに百年を超える長い期間、木を使う教育が義務教育の中で厳然と日本の中に定着しておりました。今現在でも小学校の図画工作、中学校では技術・家庭科の技術分野に歴然と入っていますが、その触れる頻度、時間数は時代とともに減ってきております。われわれの生きていく日常生活、社会の中で木との関わりも薄くなってきている。少し寂しい気もいたします。

浅田:さて、私と山下先生は、こういう基礎固めと並行して、木育の普及拡大に向け、色々なところに行きました。木育フォーラム、木育インストラクター研修会などを埼玉、島根、東京などで実施しました。そうした実施地域拡大に向けた取り組みの中から、地域に根ざした木育が徐々に始まるわけです。その1つは熊本です。熊本大学の田口先生、お越しいただけますか。

田口:よろしくお願ひします。



浅田:実はわれわれが木育のインストラクター講習会で熊本にお邪魔した時から、熊本では木育指導者養成講座を続けていらっしやっています。その内容、様子を教えていただけますか。

田口:養成講座は、今年で8年目、1,410名の修了生がいます。年6回から7回ぐらいやっていますね。林野庁の補助事業として熊本でやっていただいたのが平成21年でした。実は私も第1回目は受講者というかたちで参加しました。これは面白いということで、ぜひ熊本にこの木育というものを広めたいと思い、その年の9月に熊本大学主催で木育を実施しました。

浅田:木育実施の基盤となるような取り組みや仕組みはあったんですか。

田口:平成17年からものづくり離れとか技術離れが危惧される中で、熊本大学主催でもものづくりフェアというものをしていました。木材を素材にしたものづくりをやっていたんです。そこに木育のお話があって、そういうスタッフに入ってくださる方々を養成すると、もっと大きなことができるのではないかなということで、スタッフ養成講座として木育推進員養成講座というのをやるようになったということです。

浅田:受講者はどんな方が含まれているんですか。また、なぜ受講されるんでしょう。

田口:木育というのは新しい言葉で、色々な意味がそれぞれに取りやすいんですね。木というから林業関係者は、おれたちに関係あるんじゃないかという方々が受講して下さいますし、育というのがあると幼稚園の先生、小学校、中学校の先生が参加して下さる。また、環境、福祉、子育て、地域おこし、最近では介護予防に関わる方々まで、木育は自分たちとすごく近い関係にあるというイメージを持って下さり参加して下さいます。参加して下さる方々のほとんどは木育については何も知らないという方々ですが、それぞれの領域ではすごいスペシャリストの方々がおいでになります。その方々が木育というアイテムを持たれると、今まで以上の活動がやっけていける。

浅田：受講者募集はどうされているんですか。

田口：毎回、木育講座というのは公的には募集はかけていません。以前、参加してくださった方にメールをさしあげて、あなただったらどういう方を紹介しますかと。仲間をどんどん出してくださいというようなかたちでやっています。毎回、満杯の参加者があって、さらに広がっているところです。

浅田：こういう地域に関わっていくというところから、最初の3年が終わるくらいになると、少しずつ企業との関わりも出始めました。私の誤解もあるかもしれませんが、最も初期に木育に関わりを持たれた企業の一つは、長野の酒井産業さんではなかったかと思います。

専務の酒井久徳さん、突然の指名ですが、お越し下さい。

酒井：こんにちは。長野から来ました酒井と申します。実は、私の会社、先ほどいわれた木育委員会に「オブザーバーで参加しない？」と声をかけていただいたのがきっかけでした。会社で、「社長、オブザーバーって来たけどいいよね」といったら、「じゃあ様子見て、よかったらおれが行くから、おまえ最初行ってこい」っていわれて、霞ヶ関に行きました(笑)。

私たちの会社の社是は「自然のぬくもりを暮らしの中に」で、これを毎朝唱えて43年間やってきています。そんな考えが木育という言葉とぴったりあっていて、じゃあ、勉強に行こうということになりました。当の委員会は、先ほど山下先生、座長が言われた通り大変でした(笑)。

浅田：木育とビジネス、酒井さんの目にはどのように映りましたか。



左：酒井 久徳氏、右：田口 浩嗣氏

酒井：私の会社は全国の生産者に木製品をつくっていただいて、それを全国に卸していくという仕事をしております。だからそんな業務の中で、木育という活動で見つけた「いいもの」を、全国の皆さんにつなげていく仕事がしたいと思いました。横のつながりをしっかりもって、全国の子どもたちに木のもの、積み木を使ってもらえたらと思います。環境を考えて、これからの地球のことまで考えて、一介の会社の人間がこんな場所でしゃべるなんてこと、木育のことをやらなければなかった話だったと思います。

浅田：酒井さんありがとうございました。酒井さんはじめ、企業の皆さんとの関わりの中で、色々な教材とか遊具とか、色々なものの開発というのが進み始めるわけです。そしてさらに東京おもちゃ美術館が登場するわけです。これについては、実はリレーディスカッション2の方でお話を進めたいと思っています。

もっとお呼びすべき方がいらっしやっただけかもしれませんが、時間となりました。皆さんありがとうございました。

リレーディスカッション第2部

「木育・森育の歴史～もっと木育・森育を！」

河野：リレーディスカッション2を始めたいと思います。私、リレーディスカッション1にも登場しました森林総合研究所の河野裕之です。以前、林野庁木材利用課で木育を担当しておりました関係で司会を務めさせていただきます。

さて、さきほどのリレー1では、木育の黎明期の動きが整理されました。そこでリレー2では、木育世界のエポックメイキングともいえるべき、林野庁と東京おもちゃ美術館(日本グッド・Toy委員会)がコラボ以降の木育について話を進めたいと思います。

さてそこで、最初のお客様をお迎えしたいと思います。東京おもちゃ美術館の曾我部さんです。ご登壇いただけますでしょうか。

曾我部：皆さん、はじめまして。東京おもちゃ美術館で移動おもちゃ美術館をやっています曾我部と申します。よろしくお願ひします。

河野：私の記憶だと、平成22年に林野庁の補助事業で木



司会：河野 裕之氏

育の補助事業でおもちゃ美術館とコラボを始めたわけですが、最初はおもちゃキャラバンからスタートしたんですよね。

曾我部：四谷のおもちゃ美術館がその前年にオープンしまして、廃校を利用して、そして中を木質化しました。翌年、移動おもちゃ美術館構想が館長で理事長の多田さんから持ち上がったんです。なぜか僕にその相談が来て、ちょっと企画してくれないかと。僕もなぜか「はい」と言ってしまって(笑)。2人で半年ぐらいかけて、ああでもないこうでもない、移動おもちゃ美術館の企画を練ったわけです。

河野：おもちゃを運ぶ箱がグッド・トイレッドというか、おもちゃ美術館レッドになってたり、とても素敵でした。担当者として当時はいかがでしたか。何かご苦労はありましたか。

曾我部：箱自体は、とにかくおもちゃをたくさん入れて、しかも運ばなきゃいけない、だから1つの箱を軽くつくろうとなって。じゃあ、桐じゃないかと。そこまではよかったです。実際色々なところに運んでみると、桐の箱ってすごくデリケートです。で、やっぱり取っ手がもげたり、色々なトラブルが起こったり。私たちが3年間ぐらい、その修理作業をしながら続けていきました。

河野：私も実際に見て、おもちゃキャラバンってすごい。何だかサーカスがやってきたぞみたいな感じで、とても素敵なイベントが生まれたと思います。

曾我部：ありがとうございます。

河野：ちょっと面白い裏話があります。なぜおもちゃ美術館と平成22年に林野庁がコラボしたのかというと、先ほど曾我部さんが言われた内装を木質化したっていうのはもちろん理由の1つです。実はそれに加えて内緒の話があるんです。木育担当時代、平成20年頃だったと思いますが、林野庁長官から呼ばれたんです。なんだなんだというふうに長官室に入ってみると、「河野くん、おもちゃ美術館を表彰できない

か」と。そこで、おもちゃ美術館の多田館長のところに行って、「すみません。おもちゃ美術館を表彰させてください」とこちらからお願いした、という変な話です(笑)。

曾我部：私たちにも付け加える話があります。移動おもちゃ美術館が始まる時、木育という言葉を知る前ですが、おもちゃ美術館の膨大なおもちゃストックを全部開けて、すべてチェックしてみたいです。木、鉄、ブリキ、プラスチック、セルロイドみたいなものまでいろんな素材のおもちゃの中で、なぜか木のおもちゃだけが古びてもとても素敵に見えたんですね。

その素敵なおもちゃばかりからさらにピックアップして、次のキャラバンにまず利用するおもちゃとしてセレクトしていったんです。すると自然と、かなりの木もおもちゃが含まれていて。私たちがグッド・トイとっていたおもちゃの中にはもともと木のおもちゃが多かったです。

あとで木育の話聞いて、じゃあ木育ってということを念頭に置いて活動していこうと決めたときに、キャラバンを木のおもちゃ専門にしちゃったんですね。そうしたら翌年、なぜか林野庁さんからのお話がきた。本当にそれはすべてが3つがかみ合った瞬間でした。



曾我部 晃氏

河野：世の中に木育の神さまがいるとすれば、われわれのことをサポートしてくれていたのではなかろうかと。それぐらいうまくものがカチカチと始まったと。23年には赤ちゃん木育ひろばがスタート、同じ年にウッドスタート、そして赤ちゃん木育ひろばへ。その中で、やはり最も注目すべきはウッドスタート事業だと思いますが、簡単にご説明いただけますか。

曾我部：簡単に紹介しますと、基本的には自治体から子どもが生まれた家庭に贈られる誕生祝い品プログラムから始まっています。ブックスタートのように、その場所、その地域にお子さんが生まれた時に、ファーストプレゼントとしてプレゼントするものを木の、しかも地元で育った木のおもちゃにしよう。これに最初にまず取り組んだのは、おもちゃ美術館のお膝元、新宿区でした。

河野：でも新宿には森がないですね。まさか新宿御苑の



木を切ってしまうわけにもいかないですし(笑)。

曾我部: そうなんです。でも新宿の場合、たまたま姉妹都市が長野県の伊那市で、伊那市の方たちとつながって、伊那市の森、木、そして伊那市の職人さんたちにご活躍いただきました。それが最初のウッドスタートでした。

河野: さて、そういう風に木育が共通言語として各地に広がって、新しい化学反応を起こしていくわけです。中でも最近大きな話題になっているのは、やはり岐阜県でしょう。森林文化アカデミーの松井先生、ご登壇ください。

松井: よろしくお願ひします。

河野: さて、木育を岐阜県で進める背景を端的に言うとは何でしょうか。

松井: もちろん、森林率全国第2位というところ。第1位が高知県、第2位が岐阜県ということ。それは大きいと思いますね。資源は森しかないという岐阜県の状況があるかなと思います。

河野: この前、新聞報道にも出ていたんですが、おもちゃ美術館構想があると聞いているんですが、それについておうかがいしてもいいでしょうか。

松井: 出ちゃいましたね(笑)。岐阜の中で一番大きな都市が岐阜市、40万人ぐらいいるんですが、その中の現在、美術館と図書館があるエリアに2年後ぐらいを目指して「岐阜の恵みの森のおもちゃ美術館」をつくるという話が出ています。岐阜

県としては、恵みの森のおもちゃ美術館というのがとても大事なところだと思っています。僕はおもちゃというのは、単なる使うターゲットを絞っているだけで、子どもにとって大事な道具だと思っています。0から5歳およびその家族たちが利用者、それをあとのすべての大人たちが私たちの子どもとして支え合う。それは人だけじゃなくて、森と一緒に支え合うような、ソフトの方がとても重要ななと思っています。

河野: そういう意味では、今日のテーマである木育、森育、両方何か兼ね備えたような、構想ですね。

松井: 東京おもちゃ美術館と違うのは、中に木工室ができます。それが結構重要な位置にありまして、美術館という建物为中心じゃないんですよ。そこは岐阜の文化の森となっていて、都市における森になっているんですね。その森の中の一部として美術館があるという、そのセンターがどこにあるのかという部分が圧倒的に違うかなと思っています。

河野: そうすると、建物はシンボリックなものだけれども、その周辺と一体となって活動するみたいな、そんなイメージなんですかね。

松井: そうですね。縁側にあたるような、要するに、内と外でもっとあいまいだったじゃないですか、日本って。その中間領域的なものをどうやって表現するか。使うだけでなく、使って傷んだら直していくという、そういう暮らし方ですよ。その辺を子どもから始めようという構想だと思っています。

河野: まだ構想段階なので言えないところもたくさんある



松井 勲尚氏

んでしょうが、新しい木育の動きということでこれからも注目、応援していきたいと思っています。

次に、少し視線を家庭という社会の最小単位に落としこんで話を進めたいと思います。子育てママをキーワードにして活動されているチルドリンの蒲生さんいらっしゃいますか。ではご登壇ください。

蒲生：蒲生です。よろしくお願いします。

河野：それでは少しチルドリンの概要をご説明いただけますか。

蒲生：はい。私たちは子育てのお母さんたちがつながって支え合いの活動を全国で展開しています。主にはママまつりという地域イベントを開催しています。地域行政と共に運営していて、地域のお母さんたちの自主イベントを全国で開催しています。

河野：まず蒲生さんにおうかがいしたいのは、お母さん方を基軸にすることのよさ、メリット、目玉は何かということです。

蒲生：そうですね。なんといってもママなので、子どもがいます。子どもたちの未来のために、ママたちは活動を展開していきます。子どもたちに豊かな自然、美しい自然を残したいということをかけ声にして。そこには何か条件とか目先の利益とか、そういうのはまったくなく、そりゃそうだと納得できたらすぐにスタートして、自分のやれることをやれる範囲で動き始める。それが一番の強さ、パワーというか、心強いところだと感じています。

河野：木育・森育にあたって、いろいろなスキルを持ったお母さんたちと協力、連携しながら進めておられるんですか？

蒲生：そうですね。共通認識が「子どものために」なので、色々な種類の違うお母さんたち同士、体育会系のバレーボールをやっていますというお母さんから、クラフトが大好きでずっと編み物やっていますというお母さん、キャリアを

もっと磨いていきたいとすごく思っているお母さんなどがいて、そのお母さんたちが子どもたちと地域という2つの軸と一緒に力を合わせて地域を盛り上げたり、自然を大切にしたりといったことに取り組める。それがパワーが集まる要因だと思っています。

河野：特に森育、森との関わりについて取り組んでおられるそうですが、場所選びをはじめいろいろ大変でしょう。

蒲生：そうですね。でも、みんなで力を合わせてやっていく姿をつくっていけるので、サポートして下さる企業とか行政は必ずあって、たくさんのつながりの中でやっています。例えば、森林組合さんにお手伝いや場所を提供していただいたり、不動産屋さん、工務店さんにママたちの活動の場所を木質化していただいたり。そしてそういう場所を軸にして、今活動を展開しています。



蒲生 美智代氏

河野：ありがとうございます。お三方にお話を聞いていると、木育とか森育と、そういうものをキーワードにしなが、何か多様な人達が連携し合いながら、相乗効果を生んでいるような、木育の推進力を感じるんですが、いかがでしょう。

曾我部：木のおもちゃでできることは何かっていえば、まず見た目の分かりやすさですよね。木のおもちゃを見せてね、嫌いっていう人はいないですよ。基本的に悪意を抱かない。もう1つは、人とのコミュニケーション。木のおもちゃがあれば、子どもと仲良くなれる。子どもがすぐに飛びついて遊んでくれる。もう1つ言うと、ある木育キャラバンのときでしたが、眉間にしわが5センチぐらい寄っているおじさんたちがいらっしやる。その人たちにも木のおもちゃを見せてね、ちょっとそれで遊んでもらう。それだけで笑顔が生まれるんですね。人と自分とつながる時に、自己紹介とかしなくても、木のおもちゃを通じてさっと仲良くなれる。この力はすごく大きいと思いますね。

松井：(木や森の)問題について関心があるというところに持ってくるのが重要で、関心を持ってもらいたい人は圧倒的に都市部に住んでいる。森のことをやりたい人も都市部で

活動をしながらいろんな人と連携して、森に誘わないと行かない。そういう都市部と連携して何かをやるということが大事なかなと思います。それから子どもから始めると、子どものためだったら力を合わせてくれるんですよ。そしてその周辺には実は女性もいて。これからちょっと女性の考え方に寄り添ったかたちにするのがとても大事なかなと思っています。世の中が男の脳で動いちゃっている。

河野: みなさんありがとうございます。10年前、木育って言葉はいつまでもつんだらうなという気持ちがあったんです。でも心ある人たちがいて、手を取り合って木育をつくりあげていった。そして人と人、さらに異業種と異業種がつながりあって化学変化を起こした。そういうことなんだろうと思います。個人的には感無量です。

さてこの化学変化っていうのは、生物用語でいうと変態というんですね。変態とこの業界でいうと、はいスギダラの若杉さん(笑)。

赤ちゃん木育ひろばでスギダラとおもちゃ美術館がコラボした。その思いを持って人と人とをコラボすることの強さについてお話しいただければと思います。

若杉: いやいや。東京おもちゃ美術館の赤ちゃん木育ひろばをつくった時は、何か子どもの遊び場が面白くないぞというのがありましたね。素材も含めて。子どもだけが遊んでいいのかみたいな。大人もあそこではつらつとなるといえるのか、楽しいというか、大人が楽しいのだから子どもも楽しいだろうみたいな、そういうことがあるわけですよ。

河野: 若杉さんが思う木育って、どんなものですか。

若杉: 木育のもう1つの役割というのは、子どもだけかよ、みたいな話とか、大人ももっと楽しもうぜと。その楽しみ方と人のつながりがどうも希薄なような気がして。いってみれば、赤ちゃんへの挑戦状です。「おら、これで遊んでみやがれ、どうなんだ」みたいな。みごとに遊ぶんですよ。やっぱり子どもはたくましくて、やっぱり大人の真剣さと子どもの真剣さというのは大事だと思って。まあ、あれはデザインしたんですけども。

河野: スギダラケ倶楽部も、そういう意味では木育になると思うんですが。

若杉: スギダラケ倶楽部ってご存じですか、皆さん。日本全国スギダラケ倶楽部って、1,900名ほどの、先ほどおっしゃった変態の寄せ集まりです。世の中には不思議な人がいるもんだなと思うんですよ。自らお金差し出して、人と人とのつながりのためだけに、喜びのためだけに今日も九州からはるばる来る方がいらっしゃる。と、どうですか。大人がキラキラする



若杉 浩一氏

瞬間。これが何か木を通じて子どもたちにもつながり、社会に広がっていくと、なんかそれ素敵な価値に変わるような気がする。そんなことをずっとやっているというわけです。

河野: ありがとうございます。木育がここまで広まったっていうのは、本当にここにいらっしゃる皆さま、そして一人一人が思いを持って次の世代にバトンタッチをしていこうとする行動力だと思いました。みなさんありがとうございました。

リレーディスカッションご登壇者メモ

浅田 茂裕 埼玉大学教育学部教授、NPO法人木づかい子育てネットワーク理事長。木育推進の牽引者の一人。

山下 晃功 島根大学名誉教授、日本の木育の第一人者。林野庁の第一期木育体制整備総合委員会座長。

河野 裕之 森林総合研究所上席専事。林野庁木材利用在職中(平成18~20年度半ば)は「木育」を全国に普及するための事業を担当。

田口 浩嗣 熊本大学教育学部教授。年間1万人にもづくりの場を提供、7年間に1,410名の木育推進員を養成。木育・森育協会九州大会事務局長。

酒井 久徳 酒井産業株式会社専務取締役。長野県木曽地方に本社を構え、「自然のぬくもりを暮らしの中に」をキーワードに「木育」や「木質化」にも力をいれている。

曾我部 晃 NPO法人日本グッド・トイ委員会移動おもちゃ美術館事業担当理事。移動型おもちゃ美術館「グッド・トイキャラバン」を率いて全国を飛び回る。

松井 勅尚 岐阜県立森林文化アカデミー教授。彫刻家。木育実践研究者。木でつくり暮らしをつくる木育プログラムを開発し、研修多数。

蒲生 美智代 NPO法人チルドリン代表理事。「森のママまつり」という地域ママの自主イベントをサポート・主催。

若杉 浩一 パワープレイス株式会社シニアディレクター。杉の魅力をアピールし、日本中に杉のプロダクツを増していく日本全国スギダラケ倶楽部設立。



日本人は何を学ぶのか？ その美意識を探ります。



松井さんは様々な暮らしの中で選ばれてきた、かたちや価値観を紹介し「美意識」と「選択」について語った。

命を大切に「選択」の経験や関係を通して生命体とつながることができるレゾ・エミリア・アプローチの根幹にある平和教育は木育・森育に深い部分でつながるのではないかと話し、興味の有無にかかわらずものをとらえるための手掛かりとしてReMIDaの幼児教育の取り組みを紹介。

大人たちが廃材を宝物として大切にしている姿から子ども達が視点の転換を学び、無関心から関心をもつきっかけになると言う。

これを参考に松井さんが実践したものがMOTTAINAI工房。子ども達が森から宝物を集めてくることで森を知ることへとつながると話した。

稲庭さんは、「キュッパのびじゅつかん」で大切にしたいものや選択したいものを考える体験をしてほしかったと話し、人の選択によって演出されるそれぞれの表現の面白さや「ものをみる力・めぐる力」を育てる大切さを改めて感じたと言う。

また「前提すること」をキーワードにアートコミュニケーターの存在、自身のこれまでの活動やこれからについても語った。



対談では、「都市部にある場所が人と森がつながる場になるのではないか。」という松井さんのお話にも稲庭さんも同意見。特別な場所になってしまっている森と美術館の問題を重ね、都市部における森の問題を伝えていく場としての美術館の可能性と人のネットワークによる情報の回路の必要性について語った。

コーディネーター



松井 勅尚

岐阜県立
森林文化アカデミー教授

彫刻家。木育実践研究者。山村での8年間の生活で得た感覚をもとに、木でつくり暮らしをつくる木育プログラム開発し研修多数。2014年より、都市部における日本の木の文化再構築のための木育プログラムを開発中。2015年レゾ・エミリア・アプローチをヒントに、文化と子どもを真ん中においたまちづくりを目指す「MOTTAINAI工房」をスタート。「幼児の心とからだを育むはじめての木育」(2013年 黎明書房)編著。一陽会彫刻部委員。

出演



稲庭 彩和子

東京都美術館

1972年横浜生まれ。ロンドン大学大学院修士課程修了。東京国立博物館に非常勤勤務の後、大英博物館に職業研修にて2年間在籍。帰国後、神奈川県立近代美術館にて展覧会および地域や学校と連携したプログラムに従事。2011年より東京都美術館にてアート・コミュニケーション事業や、参加型展覧会「キュッパのはくぶつかん」など企画運営。共著に『100人で語る美術館の未来』(2011年 慶応義塾大学出版会)など。



今、ママたちの考える木育への意識は？ ～ママのチカラで日本の森を元気に～



3名の「ママ」による木育・森育の実践例の紹介が行われた。

木育・森育はコミュニケーションツール

3名の活動に共通して言えることは木育・森育を地域でのコミュニケーションツールとして活かしていることである。

はなはな*みかん代表の久保さんは、第一子の出産を機に社会との接点が減り、社会から隔絶されたような孤独感を経験した。そのような自らの経験を元に「1人ぼっちのママをなくす」ことを目指し「はないろ企画カンパニーはなはな*みかん」を立ち上げた。その中でママ達のアイデアを障がい者の作業者に持ち込み、共同で木工製品(子供用のネームプレート等)の開発・販売を行っている。木や森を通じてママ同士、ママと社会の繋がりができているという。

チルドリン小田原代表の福田さんは神奈川県小田原市で「森のママまつり」というイベントを運営した経験を持つ。「森のママまつり」では地元の寺社林を舞台に、地域の親子を対象にした木工教室などを開いた。また、日常的に親子を対象に森育イベントを開いたり、地域の企業と協働で木工教室を開くなどの活動をしている。その中で欠かせないのが地元の工務店や林業・木材団体、森林組合など、技術や知識を有する人達の協力であるという。「木」や「森」という親しみやすい素材を中心に、ママ達が行政や企業と話し合うきっかけが生まれ、結果として社会貢献が可能になっているという。

ママである事の強み

木育・森育を推進する上で、ママである事の強みがあるという。それは、ママ達が共通して持つ「子供のために」という強固かつシンプルな共通認識、前提である。あらか



じめ強固な共通認識を有するママ達であるからこそ活動の方向性が定まりやすい。また、誇りある地域で子育てをしたいという思いが地域貢献への原動力となり、「すぐに結果は出ずとも、今取り組むべきもの」という「子育て」と「森づくり」の共通点が「ママ」と「木育・森育」の親和性を高くしているという。

コーディネーター



蒲生 美智代

NPO法人チルドリン
代表理事

NPO法人チルドリンは、全国2万人のWEB会員をもち、1回に約2000名の集客を実現する「ママまつり」という地域ママの自主イベントをサポートし年間30回を主催する。活動は「食を育む、エネルギーを選択する、レジリエンス(防災)で集う、仕事に就く、ICTを活用する、森と共創する」と社会問題に拡がっている。ママたちが考える社会課題を、暮らしの中で楽しく学ぶことから始める活動を全国展開している。

出演



福田 ひろみ

NPO法人チルドリン
副代表/
チルドリン小田原 代表

チルドリンの理事として「ママまつり」をはじめ「森のママまつり」、「エネママまつり」をコーディネート。チルドリンのすべての活動に関わり、全国のママの「想い」をサポートしながら、生活のベースである神奈川県小田原市でママたちと共にフォレストカフェでのワークショップの開発やフォレストママの育成を行っています。地域材と暮らしをつなぐママの役割を、もっと地域社会に活かすために、日々ママたちと奮闘中。「おだわらウッドスタート誕生祝い品」選考委員。



久保 みどり

はなはな*みかん 代表

ママの応援、ママによる社会貢献企画をプロデュース。がんばっている方のご縁を繋ぎ、みんなの活動の場、活躍の場を広げていきたい！社会貢献をしながらお仕事をしたいと思い、「はなはな*みかん」を発足。三児の母。小学生の男児2人と2014年4月誕生の女児が1人。ここに、ほんわか、すぐ行動！がモットー。保育士、幼稚園教諭、小学校教諭一種免許、子育てマイスター、おもちゃインストラクターの資格を持つ。



「あそび空間」や「おもちゃ」や「森林活動」に 何が加わると「木育」になるのか？



はじめに石井さんが参加型の積み木を使った導入で木のおもちゃの特徴を紹介し、「木に何が加わると木育になるのか？」をテーマにそれぞれが「+α」について語った。

川上さんの木育は「木の遊び空間」+「物語」

「ごっこファーム」、「子育て支援ステーション ニッセ」や「やまなみ保育園」等の子ども達が木にアプローチしたくなる空間を紹介。子どもと木が同じ空気、水、土地で育っていく関係性について話し、それぞれが思い思いに遊びたくなるようなしかけの中で木と関わり、感じたことをたくさん言葉で伝えてほしいと語った。

石井さんの木育は「国産材のおもちゃ」+「伝え手」

赤ちゃん木育広場での日常を紹介し、面倒見が悪いともいわれる木のおもちゃだからこそ遊びへ共感し、作り手や生きている木、おもちゃにまつわるドラマを伝える「人」の存在が必要だと話した。子どもの持つ自分で遊びを見つける力を木のおもちゃは育てると言い、自分で発見した遊びができる幸せ、楽しさを伝えていきたいと語った。

福島さんの木育は「森林体験」+「感謝」

事例として川上保育園でのままごとあそび等を紹介し、体験を非日常にせず生活に取り入れていくことが、まちな向きがちな視線を身近な自然へもう一度移すきっかけに



できれば良いと話した。地域の人々に関わりながら作り手の話を聞いたり、生きている木を五感で感じたりすることで木に愛着を持ち感謝する気持ちを育ててほしいと語った。

コーディネーター



馬場 清

認定NPO法人
日本グッド・トイ委員会
事務局長

1963年東京都生まれ。中学校、高校、大学の教員を経て、2010年4月、認定NPO法人日本グッド・トイ委員会事務局長に就任。東京おもちゃ美術館が進めている「ウッドスタート」の取組で、全国各地を飛び回りながら、自治体と組んで、誕生祝い品として地産地消の木製玩具をプレゼントする事業を展開。また無印良品等の企業とも連携して、地域材を取り入れたキッズコーナーの提案等も行っている。

出演



川上 素子

V.A.Nコーポレーション

一級建築士。宮城県仙台市出身。ハウスメーカーにて木造住宅の設計に携わりその後独立、木育建築の研究を行う。またおもちゃコンサルタントとして「おもちゃ・遊び」を学んだ経験から、おもちゃ作家とのコラボレーションにより、東京おもちゃ美術館等、こどもの遊び空間のデザインや保育園設計も行う。改修工事の設計を手がけた「チューリップ保育園」が本年度キッズデザイン賞を受賞。



石井 今日子

東京おもちゃ美術館
赤ちゃん木育事業部

東京おもちゃ美術館 認定NPO法人日本グッド・トイ委員会 赤ちゃん木育事業部ディレクター、おもちゃコンサルタントマスター、保育士、幼稚園教諭。東京おもちゃ美術館立ち上げの2008年から2013年まで同館チーフディレクター。2007年からNPO法人日本グッド・トイ委員会のスタッフとなる。2011年、東京おもちゃ美術館内に「赤ちゃん木育ひろば」を企画及び開設。以降、その運営に携わっている。2児の母。



福島 計一

「共育工房IPPO」主宰

岐阜県美濃市在住。神奈川県大和市に生まれる。幼少より、近所の雑木林や畑の中を、虫や鳥、花を探して走り回った原体験を持つ。大学在学中に、神奈川県西部の丹沢山塊で起こっている様々な環境問題に触れたことがきっかけで、環境教育の道へ。環境教育指導者として約10年活動した後、木工を学び、現在、環境教育で培った「伝え手」の経験に、木工で培った「作り手」の経験を加えた「日本型の環境教育＝木育」を展開中。



環境って何だろう？ ～森に学ぶ暮らしのあり方～



木育・森育の舞台となる「環境」の定義と木育・森育の実践例について「科学的視点」から説明があった。

「環境」と「木育・森育」の位置付け

荒木さんの説明によると「環境」は「自然環境」と「社会環境」に大別される。いずれの場合も主体(生物)を定め、その主体の作用・反作用する範囲を「自然」の中では「自然環境」、「社会」の中では「社会環境」と定義する。主体と「自然環境」の集合体を「生態系」として捉え、「生態系」が健全化した持続的な社会(自然共生社会)づくりの基礎として木育・森育が重要な役割を果たす。

専門高校での森林教育

井上さんの前職は林業の専門高校の教師であり、そこでの教育(実習)の事例が紹介された。「森林」という教材には「観察(理科)」「レク(体育、特別活動)」「林業(技術、社会)」などの多様な要素が包含されており、必然的に「森林教育」の扱う内容も多岐に渡ることになる。このことは、例えば国語や数学を教える際にも木育・森育を関連付けられる可能性を示唆している。しかし同時に、教える側には森林の知識、林業技術、企画力や指導力などが求められることになる。

小中学生に対する自然活動教室

矢ヶ崎さんからは「森の宝さがし」と称した自然活動教室について紹介があった。植物は動物に比べると身近なものであるが故に普段意識しにくい。そのため、この活動



では植物との「つながり」を子供達に意識させるべく、調理や草木染めなどといった「利用面」を重視する。野外では「自然観察」と「植物採集」、室内では「山菜調理」やクイズ形式での「振り返り学習」を行い、子供達の反応を分析する中で子供達の細かな観察眼や豊かな感性が明らかになった。

コーディネーター



荒木 祐二

埼玉大学教育学部准教授

埼玉大学教育学部准教授。山形県新庄市の自然豊かな里山で育ち、横浜国立大学大学院にて博士号(環境学)を取得。大学院在学時に休学し、植物学の国際ボランティアとしてグアテマラ国立サンカルロス大学附属植物園に勤務し、植物採集や標本管理などの業務を担当。東京大学アジア生物資源環境研究センター特任助教などを経て現職。現在の専門は中学校技術科の生物育成教育をはじめ、里地里山や熱帯湿地(カンボジア)の植生とその環境マネジメントなど。

出演



井上 真理子

森林総合研究所研究員

博士(農学)。東京都高等学校農業教員(東京都立三宅高等学校農業科、東京都立農林高等学校林業科)を経て、現職。専門は、森林教育・林業教育。三宅島の豊かな自然の中で、高校生達と森林調査や園芸活動を行っていたが、2000年三宅島噴火に遭遇して全島避難を経験。転勤先の林業科では、演習林で下刈りや間伐、林分調査などを行う。著書には、『森林教育』(海青社、2015、共著)、『森林経営』(高等学校用教科書、文部科学省著作、実教出版、2004)、『日本の森林と林業』(大日本山学会、2011)など。



矢ヶ崎 朋樹

国際生態学センター研究員

公益財団法人地球環境戦略研究機関・国際生態学センター(IGES-JISE)研究員。博士(環境学)。植生学的な基礎研究から森林保全・森林再生、環境教育分野の応用研究まで幅広く着手。この研究のかたわら、森の学習講座、技術研修の講師として、一般市民を対象に森林保全や環境教育の講義を実施。IGES-JISE連続講座「みどりを守り育む知恵・技術・心得」では毎回数十名の受講生をうけもち講義。平成11年から始めた環境学習会の指導は今年で18年目をむかえ、オリジナルの学習教材を片手に小学生から大人まで幅広く指導。参加者自らの発見や発想を大切に、楽しく思い出に残る自然体験・学習活動を目指して現在も実践継続中。



楽しみながら木育の輪が広がる ポイントは？



田口さんは出来上りを思い描く楽しみや作った後も続くワクワクを演出するものづくりの良さ、正しい判断・情報をもとに木製品を買ってくれる人の育成の大切さを話し、活動を取り巻く環境から様々な情報を享受できる「正統的周辺参加」を木育に導入した例として「熊本ものづくり塾」を紹介した。

中山間地と都市部の問題の解決策として木育をとりあげ、その可能性や熊本大学教育学部で木育の理解者と指導者の育成や学校教育における木の利用促進のための取り組みについても語った。

また、熊本の木育活動が木育提供のビジネスモデルとして実現できた要因として、県の環境税、地域からの賛同、教育学部生や様々な分野の人々が活躍することにより「材料・資産の獲得」「活動場所の獲得」「スタッフの獲得・要請」「企画・運営、教授法の獲得・共有」が可能になったことを挙げた。

石田さんは、森と関わることになったきっかけとして「綾の照葉樹林」を紹介。

木を伐り、木を使うという循環の大切さや森とまちをつなぐ取り組みについて話し、「宮崎アートセンター」等の子ども達を中心にした森と身近にかかわることができる環



境や事例について語った。

森の管理不足は、時に災害として人々の生活を脅かす。上流の森の問題と下流にあるまちの問題は密接に関係していると伝え、森とまちが疎遠にならないことが大切であり、関心を持ち年に一回でもものづくりや森に出かけていく人が増えてほしいと語った。

コーディネーター



田口 浩継

熊本大学教育学部教授

博士(公共政策学)。日本産業技術教育学会理事。技術・家庭学習指導要領作成協力者(文部科学省)。東京書籍「技術・家庭教科書」監修代表。著書:暮らしの視点からの地方再生(九州大学出版、2015)において、「現代日本の森林問題における木育の意義-森林化社会に向けた都市住民活動の分析視角から-」を執筆。年間1万人にもものづくりの場を提供、7年間に1410名の木育推進員を養成。木育・森育楽会九州大会事務局長(林野庁委託事業)。

出演



石田 達也

NPO法人

宮崎文化本舗代表理事

1963年生まれ宮崎市出身。米国バージニア州立オールド・ドミニオン大学中退後、宮崎市で塾の経営を始める。95年「宮崎映画祭」の初代事務局長に就任。ボランティア活動の限界を感じ、2000年にNPO法人宮崎文化本舗を設立、初代事務局長に就任、現代表理事を務める。ボランティア・市民活動等のネットワークと、芸術文化のまちづくりの2本を柱にNPOを運営。映画館の運営、指定管理業務を活用した美術企画展の開催など活動は多岐に渡る。15年度より宮崎県綾町のユネスコ エコパークまちづくり推進監を拝命。



まちを元気にする、 デザイン、つながり、そして変人



それぞれの立場からの「まちづくり」について、日向市駅(宮崎県)のプロジェクトを中心に話が進められた。

鉄道と地域のつながり

かつて、木材生産と鉄道は密接なつながりがあった。駅舎や路線の建設に用いる素材が木材から鉄やコンクリートに変わり、時代とともに鉄道と繋がりが強かった山間部は疲弊していった。「地域の元気がなければ、JR九州グループが元気になることはない」という考えからまちづくりに取り組むようになったと津高さんは語った。その中で日向市駅再建のプロジェクトと出会い、当初はJR九州内でも反対意見が強かった木材を大量に使った駅舎作りに携わるようになった。津高さん自身、メンテナンスコストなどの観点から木を用いた駅舎作りには反対の立場であったが、後述の辻さん等の熱意に触れるうちに考えが変わったという。今では「なつ星in九州」に代表されるように、「木」を使い、日本古来の技術と現代の技術を融合させる形で業界に革新をもたらしている。

市民参加型であること

辻さんは「都市デザイン」というものが今ほど盛んではなかった時代から、孤軍奮闘しながらまちづくりに携わってきた。辻さんの携わってきたまちづくりの事例に共通していえることは、市民参加型、市民が主体となってまちづくりを進めてきたことである。資金繰りの苦しかった柳川市では地域の親子を積極的に引き込み、ワークショップという形で木製のベンチやフェンスを製作して駅に設置した。この



ように市民参加型のまちづくりは連鎖的に広がり、「ものづくり」はその場所、ものに誇りや愛着を持つことに繋がる。結果として持続的な地域活性化が可能になる。そして、その「ものづくり」の中心にあるのは地元にある削りやすい「木」であるのだと辻さんは語った。

コーディネーター



若杉 浩一

パワープレイス株式会社
シニアディレクター、
日本全国スギダラケ倶楽部
設立メンバー

熊本県天草生まれ。九州芸術工科大学工業設計学科卒業、1984年株式会社内田洋行入社、デザイン課、企画課、知的生産性開発課を経て、T.D.C(テクニカルデザインセンター)部長。企業の枠やジャンルの枠にこだわらない活動を行う。杉の魅力をアピールし、日本中に杉のプロダクツを増やしていこうという運動を展開している。日本全国スギダラケ倶楽部設立。

出演



津高 守

九州旅客鉄道株式会社
取締役、
鉄道事業本部副本部長・
安全創造部長

昭和36年3月22日生まれ。大阪府堺市出身、九州大学大学院工学研究科修士課程土木工学専攻修了。技術士(建設部門/鉄道)。
主な経歴は、日本国有鉄道入社後、国鉄改革に伴い九州旅客鉄道(株)に採用される。平成17年に鉄道事業本部新幹線鉄道事業部長、平成20年に鹿児島支社宮崎総合鉄道事業部長、平成2年に鉄道事業本部施設部長、平成24年に取締役大分支社長、平成27年に取締役鉄道事業本部副本部長安全推進部長、平成27年7月より現職に在る。



辻 喜彦

合同会社アトリエT-Plus
建築・地域計画工房

プロジェクトマネジメント・まちづくりプランナー。合同会社アトリエT-Plus 建築・地域計画工房の代表をつとめる。博士(工学)・一級建築士・技術士(建設部門/都市及び地方計画)。2003年3月「グッドデザイン賞(新領域デザイン部門)」(日向市に於ける「木の文化のまちづくり」の実践)、2005年3月「グッドデザイン賞(新領域デザイン部門)」(ふれあい富高小学校特別授業「移動式夢空間」)、2010年5月 日本照明学会 優秀賞(福岡県柳川市外堀線)受賞。主な著書、「歴史を未来につなぐまちづくり・みちづくり」(第4章) / 2006年1月・(株)学芸出版社、「新・日向市駅」共編 / 2009年3月・(株)彰国社など。

楽会を終えて

平成28年2月13、14日の2日間にわたり開催された「第1回木育・森育楽会」には、北海道から九州、沖縄まで、全国各地から木育・森育人たち、そしてたくさんの「知と経験」が集まりました。延べ400名以上が参加された今回の楽会は、木育・森育の可能性を強く感じさせる基調講演、分科会、学びの広場、ワークショップ等、さまざまなプログラムを実施し、木育・森育の次の5年に向けたアジェンダの発表を行い、無事に閉幕しました。木育・森育のプレイヤーが同じ目線にたち、情報を交換できたことは、これから新しい活動の輪を広げていく契機になったものと実感します。

今回の楽会は、情報共有の場であると同時に、木育・森育を進める我々プレイヤーの学びの場でもありました。その意味を含めて、分科会、ポスターセッション等で発表、登壇された皆様には木育・森育コーディネータ認定書をお渡ししました。また島根大学名誉教授の山下晃功氏には長年のご功績を称え、「木育シニアコンサルタント」の称号を授与いたしました。今後さらにこうした指導者養成、情報の蓄積が進められるべきと考えます。

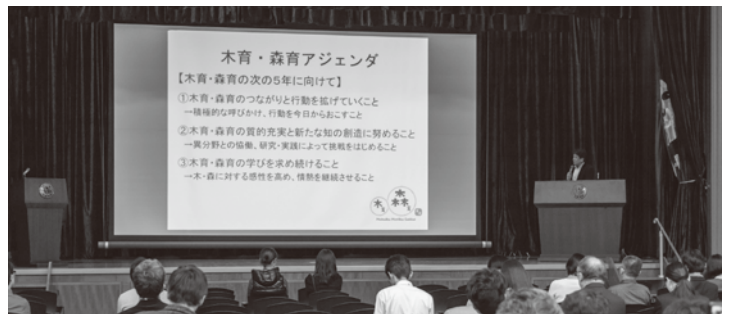
私たちが掲げていた楽会の3つの柱(1. 全国各地の情報が集まる 2. 推進のためのネットワーク構築 3. 木育・森育指導者の養成)を集まった皆様を持ち帰り、また新たな活動へのステップとなることを願っております。



楽会のまとめとアジェンダ

私たちは、基調講演、6つの分科会、そして楽会期間を通じた様々な意見交換を通じて、木育は人材の形成、文化の形成、環境の形成に資する取り組みであること、そしてこれをさらに推し進めることの必要性を認識することができました。その一方で、指導者養成システム、木育・森育の価値を示すエビデンス、プレイヤー間の緊密な連携を促すネットワークの不在など、これからの課題にも気づかされました。

こうした皆様の意見、思いにもとづき、木育・森育楽会実行委員会は、これからの木育・森育のあり方について意見を交換し、木育・森育の次の5年に向けたアジェンダを3項目としてまとめ、楽会の最後に発表しました。このアジェンダは、木育・森育の持つ多様性や可能性の制約、個々のプレイヤーの考え、行動の強制を意図してはなりません。これからの人、社会、環境をつくるために、木育・森育楽会に集まった全てのプレイヤーの共通認識として、そしてこれからの5年間の小さな約束、未来像としてまとめたものです。皆様のご理解とご賛同が得られますことを祈念しております。



木育・森育アジェンダ

木育・森育の次の5年に向けて、私たちは次のことに努めます。

1. 木育・森育のつながりと行動を拡げていくこと
積極的な呼びかけを行い、広がりに向けて今日から行動していきます。
2. 木育・森育の質的な充実と新たな知の創造につとめていくこと
異分野との協働、実践、研究の積み重ねによって、この活動の意義をさらに広めます。
3. 木育・森育の学びを求め続けていくこと
木、森に対する感性を、プレイヤー自身が高め、情熱を継続させていただきます。

第2回でまたお会いしましょう!



木育 next 10

北海道の木育、これまでの歩みと今後

KEM工房主宰／木育ファミリー代表 煙山 泰子（けむりやまやすこ）

■木育の生いたち

「木育」は平成16年度に北海道で生まれた新しい言葉です。行政と民間のメンバーからなる木育推進プロジェクトで検討され、取り組みが始まって10年の節目をむかえました。平成18年には国の森林・林業基本計画に木育が明記され、林野庁の事業としても推進されるようになりました。今では各種イベントや関連ビジネス、ボランティア活動として木育は全国的な広がりを見せています。

ここで改めて木育の理念を読んで、対象となる人々と目指すものを見てみましょう。

「木育とは、子どもをはじめとするすべてのひとが『木とふれあい、木に学び、木と生きる』取り組みです。それは子どもの頃から木を身近に使うていくことを通じて、人と、木や森との関わりを主体的に考えられる豊かな心を育むことです。」

■協働のかたち

北海道の木育の大きな特徴は、木育推進プロジェクトの検討から現在にいたるまで、行政と民間が木育を協働ですすめてきたことです。それぞれの立場と役割を尊重しながら、多くの事業や施策について「つながり」をもって活動して



「木育の10年をみつめて～木育next10」記念撮影

きました。

平成17～18年度、北海道は全道12カ所ですくなく木育ランド」を開催し来場者は延べ2万2千人を数え、木の砂場をはじめとする木製遊具とふれあう楽しさが木育のシンボルとなりま

した。このように行政側の木育は主に子どもを対象とする形ですすんでいきます。民間では木育プロジェクトの有志が中心となって「木育ファミリー」が結成され、ポプラの大テーブルを囲んで講座をする「木育リビング」等を開催し、大人に向けた暮らしの中の木育を提案しました。

このように立場とやり方の違いはありますが、どちらのイベントも家族連れで楽しく参加できるものだったので木育は多くの人に受け入れられるようになりました。

■「木育マイスター」と「北のグリーンウッドワーク」

平成21年度から北海道では木育活動の企画立案と指導などができる人材として「木育マイスター」を育成する事業がはじまり、平成27年度までに170名(予定)余りを認定しています。木育マイスターは自分の個性と地域の特性を生かした方法で、人と木や森をつなぐ活動を展開しています。また木育ファミリーでは森でのボランティア活動や身近な場所から手に入る生木(なまき)を人力の道具で小物や家具にする木工を、「北のグリーンウッドワーク」として広めています。もの作りの楽しさを通して、森と人のつながりを実感できる魅力に溢れています。

■木育絵馬プロジェクト

平成27年10月19日(日)、北海道庁赤レンガを会場に「木育の10年をみつめて～木育next10」を協働で開催。また当日は参加できなくとも、全国各地で木育活動をしている人のつながりを見る形にするため「木育絵馬プロジェクト」を事前に企画しました。オリジナルの木育絵馬は北海道産のエゾマツとトドマツ材で、表面は超仕上げカンナの素敵な書き心地です。「あなたにとって、木育とは何でしょう?」いまだのような形で、木育に取り組んでいますか?」と呼びかけ、木育への想いや木育宣言を絵馬に書いて送ってもらいました。こうして集まっ

た絵馬は138枚。当日は10年前の台風18号で倒木した北大ポプラ材の絵馬掛けに吊るして、「つながり」がひとつの形になりました!

北海道では北海道森林づくり条例の考え方に基づき、100年先を見据えた森林づくりを道民と協働ですすめることを目標にしています。私たち人間の時間はサイクルが短く目先のことに動かされやすいものですが、森の時間に寄りそって考えることで大きな目標を見失うことなく進んでいけると思います。10年ごとに振り返り謙虚さを忘れずに歩んで行けば、自然と共存できる持続可能な社会に近づきましょう。これからも様々な分野との協働で、木育の息の長い道民運動として推進していきます。

木育の10年をみつめて
—木育next10

木育next10 報告書
10 YEAR ANNIVERSARY REPORT

木育ファミリー
www.mokuiku.net

北海道の木育を体感!



「北のグリーンウッドワーク・スキルアップ研修inむかわ」生の木を自分で伐りだし、削り馬を使って 「マイストールをつくらう!」体験記

■失敗はない、やりなおせる、木という材料の素晴らしさ

今回、「グリーンウッドワーク」を体験するむかわ町は、千歳空港から車で1時間弱、道央圏の南方に位置している。今は廃校となった小学校「むかわ木育の学校」が今回の研修場所である。「グリーンウッドワーク」とは、身近な森や庭から生木を伐りだし、人力の道具で小物や家具をつくること。森や庭から出た木がそのまま材料になる、場所を選ばない、電気がいらぬし、生木を使うので乾燥させる必要もなく、エネルギーを極力消費しない、危険が少ないなど、人と環境にやさしい木工体験である。



廃校となった小学校を活用した「むかわ木育の学校」



木育ファミリーの煙山泰子さんとNPO法人グリーンウッドワーク協会的小野敦さんを講師に迎えて

くらいあるそうでフレッシュのもの、ほんの数時間前まで大地に根を張っていた樹木の命をいただいているんだと思う。昼食後は、これまで初めて見るセンという工具を使い、30センチ程度の長さの部材を削り馬に固定して削り出していく。柔らかい生木なので気持ちよく

程度の経験しかないのにスキルアップ研修に参加するとは…。不安を抱えつつ1泊2日の研修が始まった。

まずは木を伐りだすこと。学校の近所の畑の脇に生えているヤナギを伐り倒す。想像以上に立派な木だ。チェーンソーで材として使えそうな幹や枝をバンバン玉切りにしていくのだが、その豪快さに圧倒される。さすが北海道。このゴロつとした丸太から出来上がるのストールがまったく想像出来ない…。私に出来るかなあ? 初っ端から弱気になる。

次の工程は木取りだ。クサビや万力を使うのも初めてで簡単に木が割れるのに驚いた。そして、水を割ると水が溢れてくる。含水率が60%



学校近くの長いも畑横にある柳の木が今回の材料



万力と木槌を使ってイスの脚部分を切り出していく



みんなで車座になり削り馬での作業。自然と会話がうまれる

削れていくし、とっても楽しい。が、削り馬経験者の参加者の方々から遅れをとっていく、そして思った通りに削れずあせってくる。隣の削り馬で順調に作業されている木育マイスターの方が見かねて「木という材料は失敗することはないよ。やりなおせるから大丈夫!」そう言って、上手に削りなおしてくださった。これを機にほかの参加者の方々とも打ち解けて、和気あいあいと作業が進み、1日目の研修は終了した。

■すべてをつなげるもの、それが「木育」

希望した参加者は学校に宿泊し、翌朝は皆で朝食の準備だ。シイタケやソーセージ、卵や長芋、すべてむかわ町の特産品だ。土地の恵みを美味しくいただく、これも素敵な体験だった。2日目は部材を組み上げてイスの形を作ることから始まった。乾燥による木材の収縮変形の説明を受けて、2人1組になり

ホゾ穴を開けて、ホゾを組んでいく。これも人力。自力で何かをやるのが暮らしの中にいかに少ないか実感するし、反面、大概のことは自力でできるものだと思える。何とか組み終え骨格が出た。何とか組み終え骨格が出た。最後の作業であるペーパーコードで座面を編み、マイストールは完成である。



2人1組になり慎重にホゾ穴を開けていく。意外と重労働だった



ペーパーコードで座面を編む

撮影/並木博夫

る。この座編みもちよつと気を抜くと間違える、なかなか根気のいる作業であった。2日間にわたり作りあげたストールはどれひとつとして同じものではなく、作り手同様に個性が光っていた。

今、手元にあるストールを見ると、トド松が黄色く色づき、ツンと澄んだ空気の中で伐り倒した時の光景を思い出す。そして、その1本のヤナギの木が参加者みんなの椅子になり、各人の日々の暮らしを紡いでいく。一緒に作ったみんなの、その椅子とどんな時間を過ごすのだろうかと思いをはせた。今回の研修を通じて、森と木と人と人、命、時間や空間、すべてをつなげるもの、それが「木育」なんだと実感し、北海道の木育を体感できたかと思う。(取材・事務局)

自然と一緒に育ててくれる

身近な自然の中でできること

～NPO法人生態教育センターの取組み

NPO法人生態教育センター 主任研究員 松村 亜希子



■自然と人との共生を目指して
生態教育センター（*1）は、自然と人が共生する地域づくりに取組んでいます。乳幼児と乳幼児に関わる大人を対象としたプロジェクトでは「自然と一緒に育ててくれる」をキーワードに身近な自然の中でできることを大切にしています。

■自然好きな子どもを育むには、まず保育者から！「保育ナチュラリスト養成講座」

この講座は、幼保育園の先生方などを対象とした資格認定講座です。森が近くにある園はもろろん、市街地の園でも、少し視点を変えてみるだけで、日々子どもたちと楽しめることをお伝えしています。

講座は市街地の公園やビオトープで実施しています。受講者の中には「こんな街中に自然があるの？」と半信半疑の方も多いのですが、一旦講座が始まるとみなさんの自然を見る目、生きものを探すアンテナにスイッチが入ります。幼保育園の先生方をはじめ、乳幼児と関わる大人の方は、自然を楽しむセンスが素晴らしいと感じています。日々、「人という自然」を観察していらっしやるからではないでしょうか？ 街路樹でも盛り上がり、前に進めない程です。実際、自然豊かな環境にある園の先生からも「自然と遊びの宝庫でした！」

保育ナチュラリスト養成講座

- 開講 2日間講座 通年4回程度
- 会場 東京、大阪、その他
- 対象 保育や教育に関わる方、子育て支援者、学生、ボランティアの方など、各回30名
- 主催 芸術教育研究所
- 認定機関 NPO法人生態教育センター
- 内容

<ul style="list-style-type: none"> ・身近なものを活用！自然観察の七つ道具 ・自然体験ヒヤリハット ・自然とつながる絵本やおもちゃ紹介 ・チョウやバタがやってくる園庭 	<ul style="list-style-type: none"> 〈野外&制作実習〉 ・子どもと楽しむ！自然のみつけ方、感じ方 ・体験！お散歩で簡単自然遊び ・自然の中で子どもと接するときのポイント ・子どもとできる自然物の製作
--	---

※ウッドスタート宣言園（*2）必須資格
※宿泊型「保育ナチュラリスト指導者セミナー」、季節のフォローアップ「自然観察ワークショップ」なども開講

そんな嬉しい声をいただきます。講座では、みなさん自身が本気で楽しいと感じたその感動をそのままそれぞれの活動場所に持ち帰っていただけるよう心がけています。次にお会いしたとき、子ども達と実践した報告

をしてくださるみなさんの輝く表情が毎回本当に楽しみです。

■自然と子どもをつなげたい～多様な受講生のエピソードから

この講座には正反対のタイプの方が受講されます。一つは自然が好きだから受講される方。近くに森がなくても自然と子どもをつなげたい。…園に少ない自然好きとして孤軍奮闘中の方も多く、講座が仲間作りの場となっています。もう一つは自然が苦手だからあえて受講される方。苦手な気持ちを知ることが大切で、そこから気づくこともあります。そのことを講座の初めに確認し、自然からだけでなくお互いから学ぶことも大切に行っています。先生同士の交流が苦手な気持ちを軽くしていく様子がよく見られます。

事務の先生が受講されることもあります。「うちの園では発達障害のある子が落ち着くまで職員室で過ごすことがあります。担任の先生は自分のクラスがあるので、『事務の先生ちょっとお願い』となるのですが、そんなとき軒先の木や、そこにやってくる虫と過ごしたらどれだけ子どもの様子が違うか！私は自然のこともっと知りたくなつたんです。参加できて良かった！教わったことをあの子とやってみよう。そう話してくださいました。



保育ナチュラリスト講座風景「葉っぱを一枚めくってみると…!」

■自然と一緒に育ててくれる

「自然と一緒に育ててくれる」これは、いつもたくさんの先生方の声から、そして保護者の方の声から実感することです。私達は、子どもたちへの自然体験・環境教育と共に、そう感じられる大人の育成、身近な環境づくりも進めていきたいと思っています。「自然と人が共生する地域づくり」の大切な基礎となる本プロジェクトに様々な分野の方々を協働することで、取組みがさらに広がっていくことを願っています。



土曜の午前中は、パパとおさんぽ！探検&自然あそび



身近な木立の中で、赤ちゃんとお母さんのための自然体験

*1生態教育センター

（株）生態計画研究所（<http://www.eco-plan.jp/>）との協働の元、生物多様性を保全する中で生態系の健全な発展を図り、持続可能な社会を作るために、環境教育及び自然環境の保全と回復に努め、自然と共生する地域づくりに取組んでいます。

*2ウッドスタート宣言園

自然と近づく知恵を絞り、自然を取り入れる努力をする意思を公式に表明する園
（森の恵みと幼保育園がつながる ウッドスタート宣言園）
「なぐさ」<http://moku.kubabo.info/vs/nursery/>

子どもたちの伐採体験

木の命と自分の命をつなげたい

幼児教育家／森のようちえんピッコロ代表 中島久美子



背景／白いお皿

以前東京の幼稚園に勤務していた時ライオンがヌーを食べるという内容の絵本の読み聞かせをしました。読み終わったあと子どもたちは「ありあ、ヌーがかわいそう」と言いました。私はかわいそうだとも思いましたが食物連鎖のことも伝えたいと思い、「みんなだってお魚さんや鳥さん食べているよね」と言いました。すると1人の男の子がこう言いました「僕はお母さんがスーパーで白いお皿にのったお魚を買ってくるので殺してない!」。そして他の子どもたちも同じ表情をしていたのです。私は驚いたと共に焦りました。子どもたちの命と他の命が離れすぎていると感じたからです。幼児教育で命が近くにある環境を持ってないかとも思いました。これは森のようちえんピッコロを立ち上げたきっかけにもなっています。

活動の想い

森では虫や鳥が死んでいたり、スズメバチがトンボを空中で食べていたり命の循環が日々見られ、その中にいる子どもたちは大人が言葉で教えなくても自動的に命のつながりを学んでいると感じます。そして植物や木に

も命があることを伝えたいとも思っています。伐採ボランティアに入ると木が倒れるものすごく大きな音をたてて倒れます。私にはそれがいつも木の悲鳴に聞こえました。その音を子どもたちに聞いてほしい、あの音を聞けば何かが伝わるはずとも思っていました。

伐採イベント

私は任意団体の力をお借りして休日に伐採の体験をするというイベントを実施しました。イベントでは林業家の方をお招きし、ヘルメットをかぶった子どもたちと一緒に森に入り、最初に細い木を切りました。子どもたちは自分でノコギリを使用できるということにとっても喜びを感じているように見えました。

数本切った後、今度は林業家の方が太い木を切るというプログラムに移りました。木の直径は30センチ程、なるべく太い木を選んで頂きました。子どもたちは木の周りに集まり、林業家の方がお神酒を撒く姿を見ました。その姿が私には神聖な動作に見え、子どもたちも話をすることなく森全体が静けさで包まれました。「さ、切るよ」という言葉と共に子どもたちは太い木から遠ざかり、静かな森にはチェーンソーの爆音が鳴りだしました。森の静

けさとのギャップに子どもたちは戸惑っているようにも見えました。

木は予想通りものすごく悲鳴をあげてなぎ倒れました。太い木そのものが倒れる音に周囲の木の小枝たちをそぎ落とす音が加わり、メリメリメリーという爆音は機械的なチェーンソーの音とは異なり魂に降りかかるような音でした。

私はいつも伐採の音を聞くと吸った息が吐けなくなりしばらく動けなくなり、私の横にいた子どもたちを見たら彼らも動けませんでした。数歩後ろに下がってしまった子や涙ぐんでいる子さえいました。私は言葉をかけずに彼らを見守りました。その時間はかなり長時間に感じましたが実際はそんなに長くはなかったと思います。林業家の方が威勢よく「もう一本切るか?」とおっしゃいましたが子どもたちの返答はなく、1人の女の子は「もうやめて」と泣きそうな声で言いました。私はこの場はもうこれで十分だと感じました。その日は大人のまよめの言葉はなしでそのまま山を降りました。子どもたちに充分何かが伝わったと感じたからです。



子どもたちがいつも遊んでいる森の木は倒れて薪になり、その火で味噌汁ができ、それが子どもたちの血となり肉となります。どう子どもたちにかげがえのない何かを積もっていることを願います。



森育 (Play&Learning at Forest) の勧め

森は人の侵入を拒まない。森は命のつながりを教えてくれる
人を育てる「森での教育」



株式会社ON-WIPPS 代表取締役 田口 眞嗣

2009年、自然環境を活用したアドベンチャー教育の推進事業企画運営を目的とした株式会社ON-WIPPS(オンウィップス)を設立。学校教育における総合学習の支援活動として、多くの体験プログラムを開発してきた。環境教育とは違い、環境を活用した「生きる力」を育む活動であり、自己肯定感を高めることを目的としたプログラムは、多くの効果を生みだしてきた。この体験の特徴としては、大きく4つに分類される。

①地上8メートルの高さに設置するアドベンチャーコース



アドベンチャーパークコース

危険と向き合うチャレンジ精神を養うことを目的としたプログラム。短時間で達成感を味わうことができ、自己肯定感が高まる代表的な活動。全長約200メートルのコースを40分程度かけて攻略する時における自己との葛藤が大きな学びとなる。

②秘密基地(ツリーハウス)作り



家族で秘密基地(ツリーハウス)作り

個人の創造力を養い、グループ活動において必要なことを学ぶ。自分の出番と役割を感じ、仲間と共に作り上げるという協力・共感を重視した活動。

出来上がったツリーハウスから目線の違う眺めを楽しんだり、自分達風の遊びを基地で演出し、楽しむということ自体が大きな学びとなる。

③ローエレメント施設(チームビルディング研修施設)



森のスパイダー(ローエレメント)

コミュニケーション能力向上のために開発されたプログラム。危険なものに見立てて作った人工物と自然物をうまく融合させた研修アイテム。短時間でグループ力が向上するチームビルディングとして活用されている。森林内にこのエレメントを作ることで、間伐、下草刈などの作業が発生し、整備が進むという相乗効果もある。

④森の不思議冒険



森の不思議発見冒険ウォーク

観察をテーマに森の不思議を探す探検ツアー。興味をもって観察をすることにより、日ごころ視野に入らないような物も発見でき、命の繋がりを伝えることができる幼児から大人まで対応可能なプログラム。

以上代表的な4つのプログラムを中心に、様々なプログラム開発を展開している。子どもの遊び(PLAY)は、大人の関与つまり意図することが加わると、Learning(学びの場)に変化する。遊びには人間を進化させる無限大の可能性が存在し、子どもの可能性を引き出せるチャンスが存在する。整備された道になれてしまった子どもたちが多彩な地形を有する森に入ること自体が、様々な能力を高める事にもなる。森は宝の宝庫。【森が人を育て、人が森を育てる】森と楽しく戯れ学ぶPlay&Learningは、持続可能な社会を創造します。子どもが森で活動する機会を増やすことが、われわれ指導者(大人)の使命と考えています。

森を感じる木育



きまま工房 木楽里
井上 淳治

■地域の概要

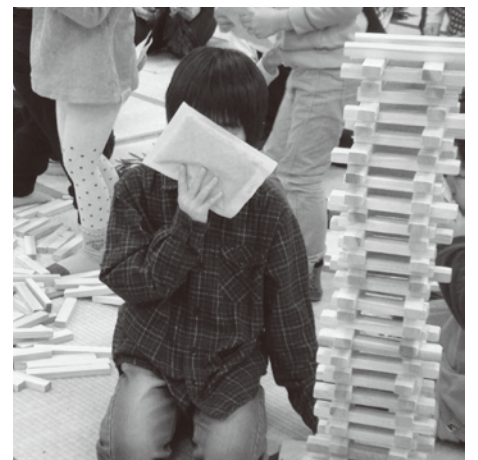
私は埼玉県で林業を営んでいます。当地域は西川林業地と呼ばれ、江戸時代より木材生産を行っています。区域面積も個々の所有規模も小さいのですが、材質の良さで知られてきた、典型的な量より質を売りにする林業地です。

■なぜ木育？

現代の生活(特に都市部)では、日常生活の中で森林を思い出すことはほとんど無いと思います。また、無垢の木に触れる機会も少ないはず。



いろいろな素材の開発により木が使われなくなりました。さらに、表面は貼ってしまうので中身は何でもいい、という使い方、考え方になりつつあり、質のよい木を売りにしている私の林業にとっては危機的状況です。そればかりでなく、日本人が培ってきた木の文化が途絶えかねません。そこで取り組みはじめたのが、林業体験イベントの開催や体験型工房「木楽里」の開設です。木楽里は開設した地元材のスギやヒノキを利用して一般の人に木工を楽しんでいただける工房です。開設当時はまだ「木育」という言葉はあ



りませんでした。これが私の木育の始まりです。そのため、私の行う木育は、森林を感じられる、木の良さを実感できる木育が中心になります。

■森を感じる木育

森へ行って間伐等林業体験をするのは、もちろん森を感じる事が出来るでしょう。私は、その体験が、体験だけで終わらないように気をつけています。間伐体験をしたら、伐った木を利用して輪切りのコマを作ったり、ボーリングをしたり、室内のオブジェにしたり。スギやヒノキの球果もリースの飾りには最高です。体験はしなくても散策するだけでも森を身近に感じる事が出来るでしょう。この時に重要なのがインタープリターです。この人材の養成にこれから取り組みたいと思っています。

しかし、森へ行くことは、参加する人も受け入れ側もハードルが高いイベントです。木工体験などの室内で行うイベントでも森を感じる事が出来るよう工夫をしています。

■木の良さを伝える木育

イチゴを食べたことも見たことも無い人にイチゴの美味しさを伝えるには、どうしたらいいでしょう。答えは簡単。食べてもらうのが一番早

いですよね。それと同じで木の良さを伝えるには、木に触れてもらうのが一番いいと思っています。木工体験は、概してノコギリやカンナの使い方など技術に走りがちですが、私は木の良さを伝える要素を必ず加えるようにしています。それには、五感に訴える、完成度を高める等の工夫が必要でしょう。よく見かける木っ端を使った木工体験は、木の良さを伝えることになると、よく考えてみて下さい。おもしろかったね、で終わっているケースが多いのではないのでしょうか。木っ端から出来上がったものをアートの領域に引き上げることが出来れば最高の木育になります。楽しい体験だけでは木の良さを伝えることにはならないでしょう。

木に触れて森を感じ、木の良さを味わって。最終的には木の家に繋がることを願って今後も木育・森育に取り組んでいきます。



森の多様性を

保育教育に活かす

森の多様性を都市型の保育現場に持込み、 子どもの多様な育ちのエネルギーを高めよう！

森と子育て文化をつなぐ研究会 ウレシパモシリ代表 高橋 京子

■活動に至る背景

20年以上にわたり子育て支援や幼稚園保育園の現場で子どもが育つために必要な環境を模索してきた結果、多様性を持ち五感力を高める自然を保育教育資源として日々の保育に加えることの大切さに、子どもの姿を通して気付かされた。自然の持つ多様性が子どもたちの多様な育ちの力を広げ、子どもたちによりたがる心の力が高まる姿が生まれてきている。

■活動の特徴

●都市型の保育に森や自然を持ちこむ

子どもたちに本物の自然体験をさせることが一番だが、現実的には都市においては、なかなか日常的に森や林に出かけられない。また、行事として森に連れだしてもその体験が「過性のもの」になりがち。そこで、子どもたちが日々通う保育園幼稚園、ママがベビーカーで通える生活圏の中にある公園で、日常的な保育や子育ての中で、あそびを通していかに森や自然と楽しく出会わせることができるかを考え実践してきた。

●保育園の木の事例

埼玉県戸田市にある社会福祉法人あけぼの会



あけぼの保育園では、長年、保育内容に木育カリキュラムを取り入れてきた。埼玉県飯能市の西川の森で、間伐体験や秘密基地を作って森であそぶ。森体験の後は、間伐材を園に持ち帰り年間通した保育教材とする。

●領域「環境」とつなげる

園庭で木の皮を剥き、木肌のツルツル感や水分を含んだ湿り気、木の香りに、子どもたちは好奇心を高める。日々のお散歩の際にも、木や葉っぱに関心を抱く様になる。また、自分たちの遊び道具や生活で使うものを作ってみる。丸太を輪切りにして独楽を作ったり、カーリングあそび。丸太を長めに切ればボーリングのピンになり木ボーリングあそびとなる。自分たちで伐り出して持ち帰った間伐材は、子どもたちの好奇心を高める。更に、木が生活に役立つものであることを、自分の箸を作ったり、木の皮で和紙を漉いてハガキを作るあそびを通して体感していく。

●領域「表現」と木育をつなげる

家庭にある木でできているモノを各自園に持ち寄る。お皿やしゃもじ、木のおもちや等いろいろ集まる。そこで、音楽の先生と共に、木のモノを擦ったり叩いたりして、子ども自身が音を創り出す。

「たんたん」「かたんかたん」「びく、びく」…など、子どもは自分で創り出した音を、言葉に出して楽しむ。最後は、その音を自由に画用紙にクレヨンで表現してみると、個性豊かな「音の絵本」がたくさん生まれてくる。

●領域「言葉」と木育をつなげる

また、秋にはきれいに色づいた葉っぱが園庭に落ちる。それを拾い集めてくる。赤や黄色、緑、ふかふか、つるつる、トゲトゲ…、五感を通して落ち葉との出会いがある。手作りの絵本を開き、開いたページの色や形、感触のモノを探してくるあそびをする。あそびを通して、落ち葉の多様な姿との楽しい出会いとなる。それぞれが拾い集めた落ち葉を教材として、次には、画用紙に好きな絵を描く。大きな葉っぱがヨットになって花びらの波しぶきを上げている絵などが生まれてくる。製作が苦手な子どもでも、多様な自然素材が、子どもの心を解き放ち自由で多様な表現を可能にする。描き終わったそれぞれ絵に、言葉の研究者が一人ひとりに、絵に寄せる子どもたちの想いを拾い集め、文字が書けない子に代わり、ポエムにして子どもたちに贈る。子どもたちの絵とポエムが一体となって、子どもたちの心の奥深くに浸透していく素敵な時間。森や自然を保育に取り入れていくことで、人工物に囲まれている都会の保育現場に、多様な保育の展開が生まれている。そして、保育所保育指針、幼稚園教育要綱にもある五領域の保育内容の実践を、より豊かに広げ深めていると感じている。

■活動にかける想い

都会といえども、改めて見回してみると樹木があり四季の草花がありそこに鳥や虫が集まり棲息している。普段は忙しく通り過ぎている私たちの生活圏の中にも、限られてはいるがちゃんと自然があり、日々色や姿を変え息づいている。そこに保育教育資源としての視点で子どもたちの育ちにあわせて楽しい気付け方出合いの場を教育的な配慮の元に、全国それぞれの地域社会の中にある保育園や幼稚園が保育環境に取り入れている。

けば、多くの子どもたちに、日々のあそびを通して多様性を持つ自然に気付かせることができるし、人工物だけでは得られない五感を通じた記憶や多様な自然物を持つことで生まれる子どもの想いを受け止めてくれる包容力が、保育現場に浸透していくと確信している。安心安全の元に、人工的に作り上げられた保育環境の中に、少しでも自然の命や営み、多様な姿や五感を通して出会わせる場を持ちこむことで、子どもたちの多様な育ちを認め合い、寄り添う保育環境を目指したい。それにより、より豊かに生きるための育ちの根っここのエネルギーをたくしつかりと育てていくことが、これからの時代に必要と痛感している。

■目指すこと

全国の保育園幼稚園の現場で、その地域の身近な自然をもう一度見直し、保育教育に日々のあそびを通して取り入れていただければ、自然は特別なモノではなく、子どもたちの日常の中に当たり前に馴染み親しみ自然との親和性を高めていくことができる。そのことを子どもと一緒を楽しみ子どもたちの想いや育ちに寄りそい、教育的な配慮の元に、保育現場で展開しつづける保育指導者の育成を目指している。子どもたちが大人になった時に、「自分もまんざらでもないな！」と思える様な自己肯定感の持てる育ちを応援していきたい。



ウッズスタートで 地域を変える

NPO法人日本グッド・トイ委員会 事務局長 馬場 清



■木のおもちゃが生み出す笑顔
それまで泣いていた赤ちゃんが木のおもちゃを渡された瞬間、ニコニコする。

渡したのはその町の町長。笑顔でこの子が立派に育つように願う。

隣には作り手の職人。丹精込めてつくった自らの作品が輝く瞬間。

それを見ている森の守り手。自分が伐った木材に命が吹き込まれる。

「ウッズスタート」。東京おもちゃ美術館が全国各地で展開している取組。地産地消の木製玩具を誕生日祝い品として地域の赤ちゃんに配る活動。その寄贈式でいつも見られる光景です。



岐阜県美濃市長から誕生日祝い品のプレゼント

■それは大都会・新宿で始まった

東京おもちゃ美術館は、2008年4月、東京都新宿区四谷の閉校になった小学校の校舎を利用してオープンした体験型ミュージアムです。中でも一番人気の部屋が「おもちゃのもり」。国産材を活用して、五感で木を楽しむことができる部屋です。周辺を高いビルに囲まれた新宿だからこのテーマ設定でした。

この部屋をつくったことで、東京おもちゃ美術館の木育活動が始まります。スタートは2010年。まさに私たちにとっての「木育元年」ともいべきこの年に、林野庁の補助事業を受託してから、一気に木育の活動が広がります。

その一環として始まったのが「ウッズスタート」です。私たちは「木育」を「木の持っている可能性を最大限引き出しながら、子育てに生かしていく取組」と考えています。そして主に以下の2つの取組を進めています。

■誕生日祝い品事業と子育てサロンの木育化

誕生日祝い品事業は2011年、新宿区で始まりました。森もない、職人もいない新宿区は、友好提携都市である長野県伊那市の材を使って、伊那市の職人が、新宿区で生まれる赤ちゃんに、年間2300個の木製玩具をつくっています。この取組が、どんどん広がり、今では20を超える全国の自治体が、「ウッズスタート宣言」

をし、木のおもちゃのプレゼントをしています。

この動きに企業も賛同。例えばあるIT企業では、社長が熊本県出身という縁で、熊本県小国町と提携。小国杉を活用してつくった「ジャージー牛のプラトイ」を社員に誕生日祝い品として配布しています。さらに毎年小国町の森林保全と林家育成のために100万円ずつ寄付することを約束してくれました。同じように、日本の森を元気にするために、11の企業が、このネットワークに加わっています。

子育てサロンの木育化も、全国各地で広がっています。例えば「やんばる森のおもちゃ美術館」。あまり稼働していなかった森林公園の「多目的スペース」を全面リニューアルしてつくられたこの空間は、やんばるの森の材をふんだんに活用しました。今では年間2万人の方々から訪れる村内中核の観光施設になりました。企業の参加も相次いでいます。例えば2015年10月にオープンしたらばーと海老名という商業施設には、東京おもちゃ美術館監修の「ウッドキューブ」「ウッドエッグ」というふたつの木質空間を設置。連日、大賑わいとなっています。



熊本県小国町で配られている誕生日祝い品「ジャージー牛のプラトイ」

■ウッズスタートで地域を変える

こうした取組がどんな効果をもたらすのでしょうか。

まずは子育て支援。地域の子どもたちに森のめぐみをお届け、森のこと、環境のことを学ぶだけでなく、木の持っているチカラで豊かな子育てを実現することができます。木のおもちゃは他の素材と違って、五感を刺激し、子どもた

ちの豊かな発達を促します。単純な形のものが多いので、見立て遊びを通じて創造力を培い、遊びが限定されないのが長く遊べます。

次に環境保全。今やほとんどの日本の人工林が伐期を迎え、木を消費することが求められています。そしてそれが森の多面的機能の保全につながり、地球温暖化防止にも寄与できます。そんなくらしと森のつながりを意識することができるのです。

最後に地方創生。日本の国土の3分の2は森林。この有用な地域資源を活用することで、衰退しつつある林業、林産業の振興だけでなく、市民参加のまちづくりや観光資源にもなります。おもちゃを通して自分が住んでいる地域を、生まれ故郷を、再評価する機会にもなるのです。

これからは是非、全国各地にこのウッズスタートの取組を広げたいと思っています。それはひいては、川上から川下まで、多くの方の笑顔を作り出すことにもつながります。その笑顔が、地域を越えて、日本の森を元気にする。いや、国境を越えて地球を元気にする。そんな持続可能な社会を作り出すために、まずは木のおもちゃから始めてみませんか。



沖縄県国頭村にオープンした「やんばる森のおもちゃ美術館」

クリスマスツリー植林

公益財団法人 木材・合板博物館

新谷 百々香



当館では毎年5月、植林活動を行っています。植林とは苗木を山に植えることですが、植える場所に合った苗木の選定、地ごしらえが必要で、沢筋であればスギを、尾根筋であればヒノキを植えるのが一般です。寒冷地ではカラマツやトドマツを植えます。ボランティアが行う植林活動は、地ごしらえ、植え付け、下草刈りなどの労働を提供するのが一般ですが、当館の活動は少し違います。

まず、活動場所は北海道苫小牧市の「イコロの森」です。イコロとはアイヌ語で宝物のことです。「イコロの森」は私有林で、かつてカラマツを植えていましたが、管理せずに放置された結果、現在ではコナラ属の木などが生える雑木林となっています。この場所は苫小牧市の中心部からほぼ北へ12キロ、新千歳空港から南へ4キロの丘陵地にあつて、北海道では温暖なところです。

一般の植林活動と違う点がいくつかありますが、まずは植える木です。苗木はアカエゾマ



ツです。アカエゾマツはマツ科トウヒ属の木で、北海道からユーラシア大陸の東端に分布しています。材はヴァイオリン、ギターなどの弦楽器やピアノの響板に使われています。製材は北海道では主要構造材として、本州以南では各種造作材として使われています。なぜアカエゾマツかというと、当館ではクリスマスシーズンにクリスマスツリーとして販売されていて、ご家庭や職場に北海道から届く仕組みになっています。そのツリーとなるのがアカエゾマツなのです。クリスマス期間はその苗木にオーナメントなどをつけてクリスマスツリーとして楽しんでいただきます。クリスマスが過ぎたら北海道へ送り返し、植林用の苗木となります。本年度の苗木の販売価格は5千円でした。地ごしらえ、鉢植えツリーの往復宅配便、植林までの苗木の養生撫育等々の経費を差し引くと協賛企業の協力をもつても足が出る公益事業です。

博物館がこの活動を始めたのは2011年からで、生きているクリスマスツリーでクリスマスを楽しんだ後、その木を山に植林し、その木の成長を見守ることができるのが特徴です。

これまでに、およそ1300本のアカエゾマツを植樹しました。2012年に植えたおよそ40センチだったアカエゾマツが3年経った2015年にはおよそ140センチまでに成長しています。参加者の中には例年子供連れの方がいて、子供の成長と共に木も成長することに感慨を深くし、子供自身も木というものに興味を持っている姿を見かけます。私たち博物館スタッフは、植樹した木が木材として使えるようになるためには、子供たちが大人になるまで待たなければならぬこと、さらに木は有効な循環資源であるけれども手間暇がとてかかる資源だということを認識してもらえるように活動を行っています。

木の溢れるまち

「小田原」に向けて

おだわら森林・林業・木材産業再生協議会



■「木の文化」が根付く、川上から川下が集うまち

小田原地区では、箱根寄木細工に代表されるように、食器、おもちゃ等の木製品の生産が盛んで、全国的にも高い技術を有し、往時には現在の約6倍ともなる約三千人もの木製品産業への従事者がいたところです。

また、市の面積の約4割は森林であり、市内には森林組合、製材加工・卸売業、工務店、宮大工など、木にまつわる川上から川下までの産業の関係者がすべて揃っています。

現在、当地では、地域材の利用拡大による産業振興、森林整備の充実を目指し、川上から川下までの関係者が連携を密にし、積極的に木育事業の推進に取り組んでいます。

■森を身近にする、物語を重視した木育活動

大人も子供も、木を伐り出し製材する、それが建物になる、食器などにも加工される、という、それぞれの仕事を見て体験し、川上く川中く川下の流れがひとつに実感できる、それが小田原での木育であり、具体的には次のような取り組みを行っています。

①「きまつり」の開催や植樹体験などの実施、木育関連イベントへの参加

主なターゲットを親子に、「きまつり」の開催や「ふるさと森づくり」での植樹体験等を実施しています。特に「きまつり」は、以前には各団体が個別に実施していた木育イベントを森の中の夏祭りとして集約したものです。ここでは、木育の授業に始まり、間伐体験、製材所見学、木工体験をする「森と木に包まれる日帰りツアー」を中心に、「ツリークライミング」、「森林ヨガ」、「森林ナイトハイク」など、森や木を感じられる催しを多数実施しています。また、他にも親子が集まるイベントにおいては、地域材を用いて制作した、小田原城を模した木組みのジャングルジムや、0歳児からでも遊べるキッズ

スペース「こゆるぎひろば」等を展開しており、来場者からは好評を博しています。

②小学校への木育事業

山の木が、日常的に使う木製品と直結することを理解してもらうため、関係者の支援の下、小学校において、間伐体験や木工体験などを授業に取り入れてもらっています。また、この実施にあたっては、学校の有無など、それぞれの小学校の状況等を踏まえたものとするともに、授業終了時には、間伐材を利用した鉛筆を配布し、実際に森林整備に貢献しているという感覚が得られるように配慮しています。

③妊婦さん・ママ向けの木のおもちゃ作りワークショップ等

赤ちゃんが初めて出会うおもちゃ「ファースト・トイ」として、市では、妊婦さんや乳幼児を持つ父母を対象に、地域の木を使った赤ちゃんゴマ制作のワークショップを開催しています。また、小田原には、木製おもちゃの製造を生業とする作家等も多いため、木のおもちゃが理解され、地域で製造されるおもちゃの利用が拡大するよう、新生児が産まれた家庭を対象に木のおもちゃを贈呈するとともに、地域の木のおもちゃをまとめた独自のカタログ等を配布しています。

■木育による地域材利用の拡大、持続的な循環サイクルの確立に向けて

森・里・川・海が広がる小田原では、地域産材の利用拡大の一環として、子供のころから木に親しみ、生活の中で木の良さを実感する機会を創出するため、木育事業を推進しています。小さな地域で顔が見え、「川上」から「川下」が全部揃い、マーケットに近い当地だからこそできる取組みによって、森の整備が豊かな海の保全とつながる、持続的な循環サイクルの確立を目指しています。

年中児の箸使いが 全員美しくなりました！

心と身体を育む「園でつかうマイ箸づくり」 日常生活に手間ひまを惜しまず



岐阜県立森林文化アカデミー教授 松井 勲尚

喜びを共に分かち合う。1月から3月にかけては、毎日の給食で箸使いの練習である。箸はスプーンと違い出番が多く、繰り返し取り組むアイテムとして最適である。

岐阜県立森林文化アカデミーは2001年開学以来、森林林業に関する担い手の育成と同時に、文字通り木育・森育の仕組みづくりを推し進めて来た学校である。木育寺子屋、森のようちえん、プレーパークグリーンウッドワーク等、持続可能な社会を目指す様々な取り組みを展開してきた。ここでは、2010年から筆者が卒業生たちと進めてきた、『幼児のための、木でつくり園でつかうはじめての木育』(*1、*2)のうち、劇的な効果が認められた「園でつかう箸づくり」のプロジェクト報告をする。

■プロジェクトのプロセス

このプロジェクトは保育士が研修を受けた上で、年中児を対象に園の実情に合わせて無理なく実践する試みである。7月の保育士研修に始まり、9月には保育士を園児に見立てて予行練習。10月には、初回の1日を親子行事としてスタート。11月の1ヶ月間は通常保育の中での制作の場であり、子どもたちが自身の心と身体を育むための重要な時間を積み重ねる。12月には仕上げの塗装を親子行事として実施し、完成の



1月 昼食時。禅僧のような立ち振る舞い
写真提供/岐阜県美濃市美濃保育園

■単なる木工教室ではない！

木でつくることは、それだけでも楽しい体験であるが、このプロジェクトは以下の大人の願いを、実践者が工夫して取り組むことが特徴である。

①暮らしの道具を自分でつくり、つかう
専門的なスキルを持たない担任の先生が自ら子どもに教えることを大切にしたい。「つくりつかう↓なおす」という日々の暮らしのサイクルを取り戻すためには、身近な大人である担任の役割が重要である。



10月 親子行事。外部講師ではなく、先生がノコギリの使い方を伝える
写真提供/愛知県大口町立北保育園・西保育園・南保育園

②用の美

実際に使えるモノをつくることは大きな学びにつながる。特に箸・スプーン等、食の道具は、安全であることが求められる。使えるレベルとは、同時に美を具えている。大人の願いとして、そのクオリティまで根気よく導き、美意識を育むことが重要である。

③木は生きもの

椅子や箸等、暮らしの中で使われる木の道具は、もとは地球上の同じ生きものであることを如何に伝えていくかが大切であり、その伝え方に保育士ならではの専門性がでる。

■サクラからカシへ

「箸づくりはサクラより堅いカシの方がいい。」(年中担任)
実践した保育士は、時間がかかる方が、子どもたちの根気を引き出したり、無理のない姿勢を体得することができるのではないかと考え、

それが可能な樹種を選択することにした。何を目的としてつくるのか？手間ひまかけてつくり、使い続けることが、モノへの愛着が生まれ、モノを大切にすることを信じたい。



11月 通常保育。無理のない姿勢は身体だけでなく心も育む
写真提供/愛知県大口町立北保育園・西保育園・南保育園

■川下から川上を想う

日本の総人口の10分の1が東京都に集中していることは言うに及ばず、人口のほとんどが都市部に住み、森林と親しむことが難しい時代に入って久しい。森林との距離が遠くなったことと、モノを使い捨てるようになったことが重なる。木でつくり暮らしでつかう体験がモノの命や人の命を考えるキッカケになるのではないだろうか。日本人は、木に向かうことを通して、思い通りにならない自然を感じ、心を育んできた。暮らしを自分の手でつくることを今一度取り戻していきたい。最後に実践者のコメントを記す。

「箸を噛まなくなったし、落とさなくなったんです。箸つかいもお片付けもとても丁寧。」
「誰も何もいってないのに、食べる時間をとても大切に過ごしているように感じました。」

*1 日本グッド・トイ委員会 筑波大学との共同研究

*2 『幼児の心とからだを育むはじめての木育』黎明書房として出版。

森と木の村が取り組む 木育・森育拠点づくり

岡山県西粟倉村が取り組む 子育ての場づくりとその狙い



NPO法人サウンドウッズ代表理事 安田 哲也

■小さな村の大きな存在

森林と木材に関わる者にとって、岡山県にある人口1500人の小さな村は特別な存在です。第一回ウッドデザイン賞選考会で、村内に拠点を置く「株」西粟倉・森の学校」が最優秀賞を受賞し、その知名度は確実なものとなりました。

2008年に「百年の森林構想」を掲げ、独自な自治体運営をスタートして8年になります。



村の杉林
村内には杉林の森林が広がる

■サウンドウッズの仕事

私たちNPO法人サウンドウッズは、木材の利用を通して森と街をつなぎ、木づかいで地域の森を育てる活動を、人材育成や森林所有者支援、イベントツアーの開催などを様々な展開しています。その中の一つとして、地域の木材を、住まいや公共施設、木製品などにして暮らしに届け、地域の森林と暮らしの豊かな関係づくりをプロデュースする仕事があります。

サウンドウッズが村づくりの一部をお手伝いして、今年で4年目になります。西粟倉村での仕事は、村の木でつくる役場庁舎、コミュニティホールおよび保育所等子育て施設を改築

する基本構想づくりです。この施設整備は、村の行政サービスやコミュニティ活動の主要な場となるよう、施設のあり方や活用方法を、行政、住民、事業者と共に検討しています。



基幹施設基本構想検討住民ワークショップ
どんな木の施設になるといいか、参加者で意見を出し合う

■「百年の森林構想」と「木育・森育」

林業を核に据えた村づくりに取り組む西粟倉村では、木育事業が活発に展開されています。「木育インストラクター養成講座（H26年10月）」の開催や、村が所有する木のおもちゃコレクションを活用した「森のおもちゃフェスティバル（H27年10月）」など、村内外からの参加者を集めています。村立西粟倉小学校は、「学校の森フォーラム（公益財団法人ニッセイ緑の財団）」のメンバーでもあります。

その取り組みを支える「百年の森林構想」は、森林林業や木材産業に関わる住民はもちろぬ、豊かな森に囲まれ暮らしを営むすべての暮らしを楽しく豊かにする基本方針です。

百年の森林構想の目に見える成果を目指した基幹施設整備構想では、村にとって本当に大切なものは何か、公共施設のあり方や行政サービスやコミュニティ活動の充実が議論されています。中でも急務となっている保育所と児童保育の機能を持つ子育てスペースの整備には、村の将来を担う子供たちへの熱い思いが盛り込まれます。

■木育・森育の拠点を「つくる」！
基幹施設整備構想策定のために、「木育ワークショップ（H27年9月）」を開催しました。埼玉大学浅田茂裕教授を迎えて、木材でつくる子育てのスペースが子供に与える効果を、村の子育て世代の親子に参加いただき意見交換会しました。



木育ワークショップの様子
託児スペースで子供たちが木のおもちゃで遊ぶ姿を専門家が解説

豊かな森林に囲まれたこの村でも、森林や木材に関する疑問は、都市部に住む方と、それほど違いはありません。林業、木材製造流通や木工などの仕事としての関わりはともかく、いざ日常の生活での森林や木材の関わりを問われると、「村の木ってどんなもの？」「何が作れるの？」……と、素朴な問いが飛びかいます。

施設建設の基本構想の検討と設計を進める過程は、自らの暮らしの背景にある森林を知り、木材の活用手段である建物や家具を考え、魅力的な暮らしに気付く、まさに「木育・森育」の場となっています。

将来の希望をつなぐ熱い思いが込められる子育てスペースは、保護者や地域の人も巻き込みながら、これから何代も受け継がれる「木育・森育拠点」を目指しています。村の誇りとなる木に触れ森を感じる教材となるべく、1500人の村は、今、将来構想を練っているところですよ。

子どもの能力を自然にのばす 森の学校とは

感じ考え行動する次世代のリーダーを育てる 学びの舞台に、なぜ森は最適と考えられるか

特定非営利活動法人 森の学校楠学園 代表理事 藤浦 清香



■森の学校楠学園とは
「えっ、いいんですか!?」学園を見に来られる方から頻繁にとびだす言葉の1つだ。小さい子が鋸を持ちだしたとき、屋根に上がる子を見掛けたとき、生徒だけで旅行すると知ったとき……数え上げればキリがない。



森の中で工作を。幼児と中学生が共に楽しむ

な学校だ。小中学部(楠学園小中学部)と幼稚部(森のうちえん・つくしんぼ)、プレーパーク(冒険遊び場かむおん)を併設し、2015年度の生徒は17人。元気な声を森に響かせている。区分としてはNPO法人を経営母体とするオルタナティブスクール(AS)、つまり独自の方針を持った学校になる。フリースクールの一種だが不登校児の学校復帰を目的としたものではなく、基本的に入学から卒業まで在籍する。

■ASは第3の学びの場

現在、地域社会や家庭環境等の状況も様変わりする中で学校は多種多様な役割を求められるようになった。だが平等で広範な教育の質を求められる公立の学校は柔軟な対応を得意としない。そこで第3の学びの場として注目を集めているのがASだ。

公立学校との違いは、弾力的なカリキュラムを組める点にある。全ての教科で一定水準以上の結果を出すという考えを捨て個々の適性あるいはグループの実態に即したカリキュラムを組むことで、社会で活躍する方向性を見いだせる。

私立学校との違いは、評価をせず時機を待つことができる点にある。人は自らが関心を持ち行動を始めたとき驚くほどの集中力と吸収力を発揮する。学習も遊びも全く同じだ。長期的なスパンで子どもの成長を捉え、信じて待つのが大人の役目だ。

イベント型の自然学校との違いは、意識の制限を開放できる点にある。指示待ちを繰り返すと物事に対し受け身になる。主体は常に自分たちにあり、結果は責任を持って全て引き受けることを伝えられる環境は貴重だ。



子ども工務店。間伐から建築まで自らの手で



倒木を運ぶ。秘密基地の柱となった

■「森の学校」である必要性
森が学びの舞台として最適と考えられる理由は3つある。

1つには森には自然界の摂理と法則が在る。土と水と植物と動物たちとのつながり、形や匂い、色彩の必然性、それに落ち着き。人は森で過ごすうち、ふとその法則に気付く。あるいは無意識にそれらを自分の中に取り込む。それは人生を生き抜く基礎力となるだろう。

2つには森には便利なものが一切ない。現代日本の成熟社会では整えられたものが余りにも多く、特に身構えずとも安全に快適に暮らすことができる。一方森では、全てに対して真剣にならざるを得ない。蜂や蛇に出会ったなら全力で危険性を見極める。遊びたければ強靱な藪や枝を探す。子どもたちを見ていると実感するのだ。何もないとは工夫次第で何でもできるに等しいということ。

3つには森にあるものは子どもの手に負える。特に木は小刀や鋸、金槌などの簡単な手道具さえあれば容易に加工することができる。実際、楠学園では2〜3歳からおもちゃを作りはじめ、6歳では自らの机を、10歳頃には大きな遊具や基地などを作る姿が見られる。不具合は改善すればよい。崩れたら作り直せばよい。そこには「失敗はよくないこと」という概念は存在しない。試行錯誤を繰り返す過程で、子どもたちは観察力・思考判断力・行動力などを着実に身に付けてゆく。

■最後に

楠学園はよりよい学びをめざした結果、他には見られない活動を実現する場となった。しかし、子どもを目の前にしたときにできることは工夫次第でいくらかもあるはずである。自ら感じ、考え、行動する子どもを育てるために、関わる大人自らも感じ、考え、行動し、試行錯誤を続ける姿勢を持ち続けたい。そして全国各地に森や木を活かした学びの場が広がっていくことを祈念する。

「遊木育」・子どもが木で遊び木で育つ幼稚園



島根大学教育学部附属幼稚園 副園長 伊藤 英俊

■木育との出会いと遊木育の取組

木育との出会いは、昨年に遡ります。島根大学の山下晃功名誉教授にお世話になり、「ロボ木ーをつくろう親子教室」を行いました。ロボ木ーは、ヒノキでつくられており、子どもが木づちを使い自分の手でつくり上げていきます。木のよい香りに包まれながら、親子でロボ木ーの衣装をどうするか等、会話をはずませながら創造していく活動です。



ロボ木ーをつくろう親子教室



お気に入りのロボ木ーができてにっこり

私は、副園長として初めてこの講座に参加しました。その時です。私の脳にピピッとひらめきが沸いてきました。「このヒノキのパーツが、遊戯室二面に広がっていたら、子どもたちはどんなに心躍らせて遊ぶだろうか?」「木のおもちゃは、幼稚園教育で育てたい姿の重要な部分になりカバールできるのではないか?」という考えです。

この、幼稚園に木のおもちゃを取り入れたいという考えを、早速山下先生に伝えてみま

した。すると、二つ返事で一緒に木育を取り入れた幼稚園にしていこうと受けてくださり、2人は意気投合したのであります。そして、「子どもが木で遊び木で育つ教育」を実現させることを願い、「遊木育(ゆうぼくいく)」という言葉をやっつけフレーズに掲げることになりました。

■子どもの姿から見える木育の教育効果

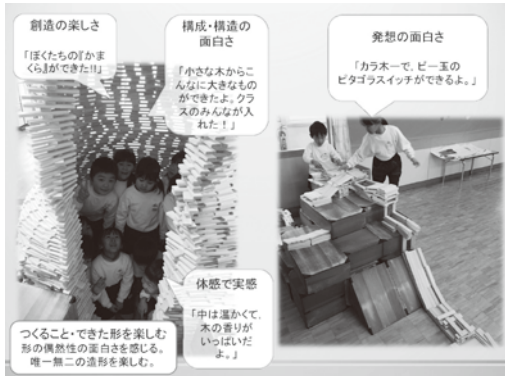
遊木育の第一弾として導入したのが、「カラ木ー」という積木、5千本です。長さ15センチ、幅3センチ、厚さ1センチの木曾ヒノキでできた積み木です。この積木で遊ぶ姿から、様々な教育効果が見えてきました。これらの姿は、正しく幼稚園教育で育てたい姿であります。木のおもちゃで遊ぶ体験は、感覚や感性、思考力、

協同性等をはぐくむのに、大きな効果を生むことが期待できます。次に効果の一端を紹介いたします。

- 根気よく集中する姿が見えます。そして、うまくできたとき、達成感を得ている様子が見えます。
- 指を使い、音を聴き、においを嗅ぐ等、諸感覚を総動員して木に向かい、表現を楽しむ姿があります。
- 友だちと一緒に作りあげるにより、楽しさやうれしさを共有し、協同して遊ぶ姿が多く見られます。時には、途中で壊れてしまい気まずい雰囲気になることもあります。その状況を乗り越えようとする姿も見えます。



子ども主体の遊びが展開される



構成、構造、創造する経験が得られる

■今後の展望

木育を導入して約1年が経とうとしています。最近では、保護者から「家族でお店に出かけたとき、木の商品を見つけると、においを嗅いでいる」というような子どもの姿を聞くことが増えてきました。また、幼稚園でも、園庭の木々の葉を見比べて葉の模様(葉脈)の違いを発見する姿や、遊びに使うために丸太をのこぎりで切る姿等、木に触れて遊んでいる姿をよく目にします。

木に触れることにより、木へ愛着をもち心寄せる姿となつて現れ、また、木に関心をもつことで気づきが言葉として表れています。このような姿がもつとたくさん生まれてくるように、今後は、次のような事を進めていきたいと考えています。

- ① 教育効果のある様々な木のおもちゃの導入
- ② 園舎内の木質化

①については、手指の巧緻性や思考力、非認知能力等、多角的におもちゃの効果を見いだし、有用な木のおもちゃを導入することによって、幼稚園教育の充実を図っていきたくと考えています。その際、効果測定等の評価を取り入れ、他園に情報提供することも試みたいですが、②につきましては、夢の部分もありますが、保育室や絵本の部屋を木質化したいと強く思っています。東京おもちゃ美術館では、部屋の40%を木質化(スギ板を使って)にすることにより、赤ちゃんが泣かない等の効果を得ていると聞きます。本園でも、そのような快適な居場所となるような空間を作り、素晴らしい木育幼稚園にしていきたいと願っています。

参考文献

- ・「幼児の心とからだを育むはじめての木育木にふれる・木でつくる・木で遊ぶ保育」認定NPO法人日本グッド・トイ委員会監修、松井尙編著、2013
- ・「積木と保育」吉本和子、脇淵潤良、エディトル研究所、2014